



UTA★PRI
Pri♥Haru R18 Anthology

Make Love Songs



UTA ★ PRI
Pri♥Haru R-18 Anthology

Make Love Songs











Handwritten signature or mark.





てきにあらんた
あしがた♡
にぎぎぎ!

とっ



んっ
ん

っあ

ちゃ

ちゃい

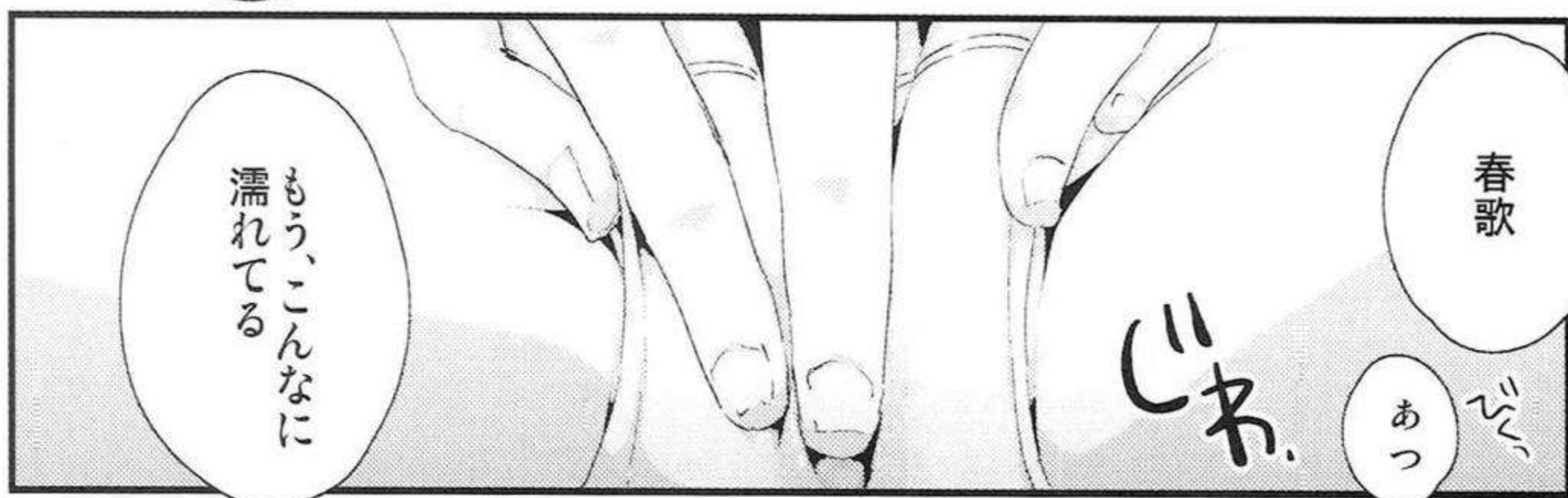
(あま)

っん

ふ

ちゃ

うん
ちゃ



春歌

いあ

あっ

びん

もう、こんなに
濡れてる



すっ
♡
♡



すあ

ん

ん

(あま)

音也、
く



ちや

ちゃんと
さわって

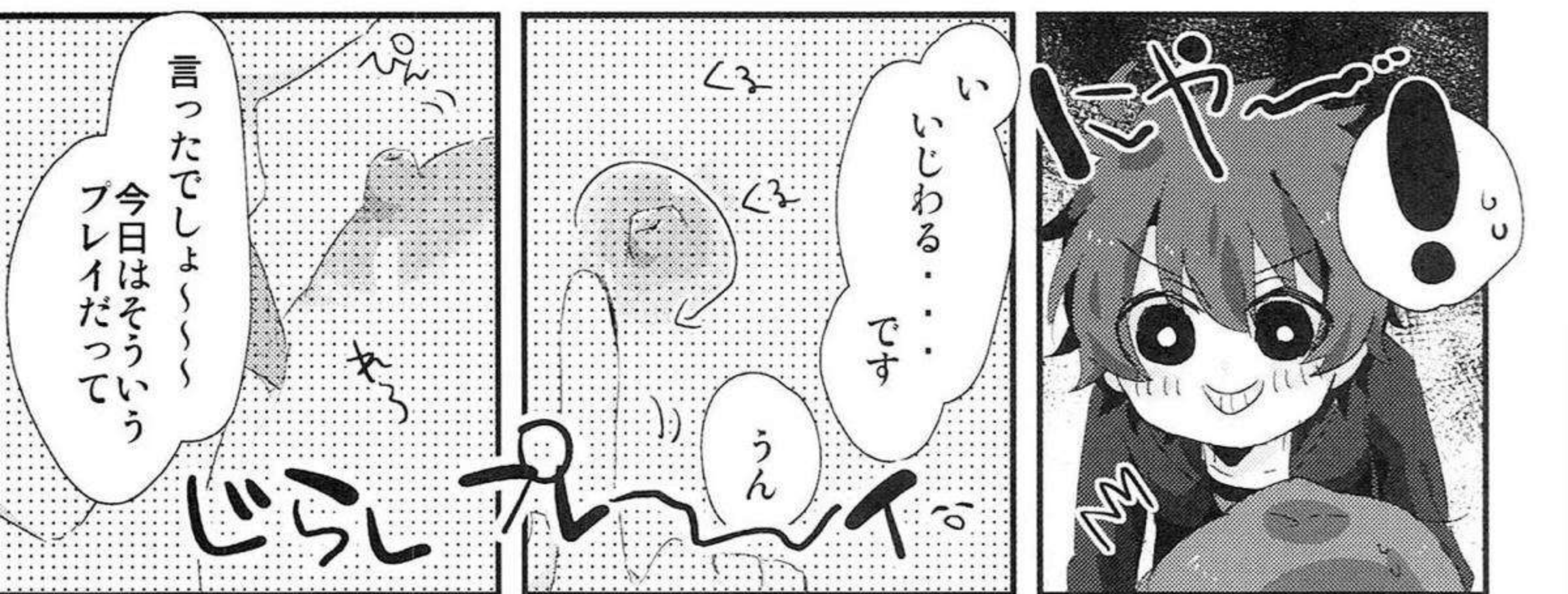
くだ

さい……

んん

どこを?

どうやって?



言ったでしよ〜

今日はそういう
プレイだって

い
いじわる……
です

うん

じらし

プレイ



お・お

た・ー・ん・♡



たまには
こういうプレイも
いいかな



俺もちよつとは
慣れてきたし

ねっ



やです

なんて



言ってみてよー
ほら

音也くんの
ぶつといおちん○ん
春歌のおま○こに
いれてください

って

どこでそんなの
おぼえたんですか

おぼえてる





お願い
してくれないと

ここで
やめちゃうよ?



まあ
それは冗談として



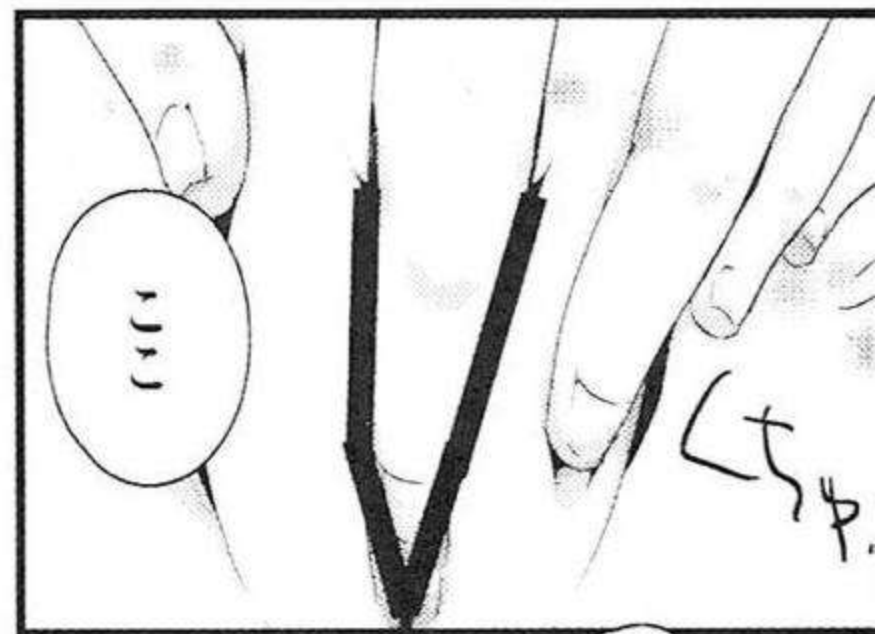
・・・さわって

ほ
しい

です

ん、
ん、

かっ
な

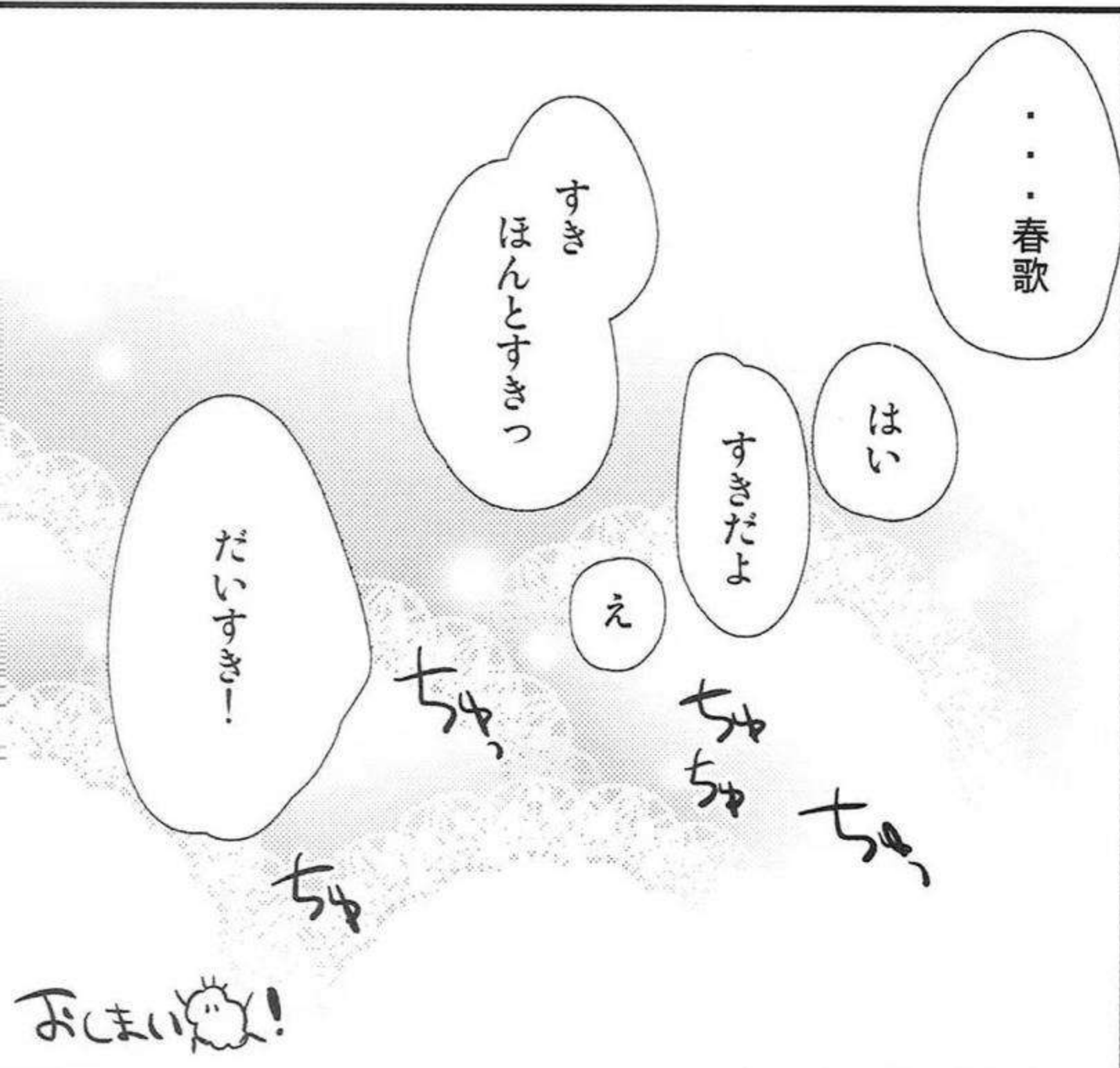


こ



さわって、
ほしく

ない?



$$\vdots$$

あれ……

真斗くん
？

目が覚めたか

付き合ひとはいへ同行
させて悪かつたな……
もともと強くはないの
だから酒は断つても
よかつたのだぞ？

そういえば
成人祝いも乾杯
だけで真つ赤に
なっていたか

⋮
?
?

ああ：いい
眠っている
もう寮の敷地内だ
じきに着く







…ハル…

無理はしなくて
いいからな…

はぁ



まさしくくんが
気持ちいいと嬉しいから…
こうするの、好きです

今日は…
…っん…わたしに
させてください…



はい…
大丈夫
です…

ちゅーっ♡



ハルがこれほど
積極的になるとは…
かなり嬉しい…が…



やはり相当酔っているのか…
そんな状態のハルと…
本当にいいのだろうか？

……いや！よくない！
よくないだろう聖川真斗！！
紳士として酒の勢いに任せて
淫らな行為に溺れるなどと…

冷静になれ！
情熱的な自分に支配
されてはいけない…
冷静に考えるのだ…

ま…真斗くん
…っわたし、
なんだか…っ

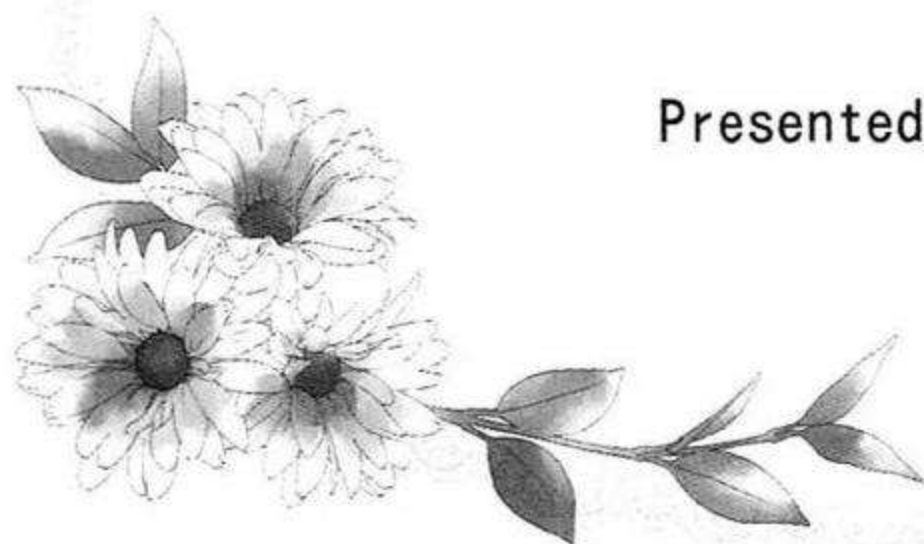
はあっ





ピアノレッスン

Presented by うに



「ごめんなさいっ、遅れてしまっ！ あ、急に先生に資料の片づけを頼まれてしまっ、それが思ったよりバラバラで、時間がかかって……あ」

予定時間より遅れ、春歌が急ぎ飛び込んだ教室には既に約束相手である聖川真斗が居た。彼はいつものように、繊細で華麗な指を動かしピアノを弾いている所だった。春歌もすぐに真斗の隣に移動し、ピアノの長椅子に腰かける。そこは春歌が座るのを待っているかのように、きちんと場所が空けられていた。

二人はすぐに連弾を始める。こうしていると、時が経つのも忘れる程楽しい。お互い忙しい上に、両想いである事は周囲に隠してこっそりと付き合っている状態なので、こんな風に二人きりで過ごせるのも久しぶりだった。

一曲弾き終わると、二人はごく自然にお互いを見つめ合っていた。

「真斗くん……」

思わず呟いた春歌に、真斗は苦笑を漏らした。苦い、笑い方だった。

「皆の前では、聖川、だろう」

「そうですね……」

でも、だって、ここは誰も居ない防音の部屋で二人きりだから、とは流石に春歌は口に出来なかった。仮にも学校の教室の中で子供じみた我儘など言えるわけがない。

しゅんとしてしまった春歌に、真斗は愛おしい気持ちを抑えきれない。只でさえなかなか会えない可愛い恋人と二人きりなのだ。彼は春歌の右手を取って囁いた。

「ハル、そう落ち込むな。俺もお前と同じ気持ちだ」

「真斗、くん」

そのまま真斗は春歌の手の甲に軽く口付ける。春歌の手は白くすべすべで、そして暖かい。そこに口付けた事で、真斗の悪戯心がむくむくと沸き起こった。彼はそのまま、春歌の指を一本口に含み、舌と唇で優しく愛撫を始めた。

驚いたのは春歌の方だ。手の甲にキスをされるだけでもドキドキするのに、指をパクリと咥えられ、そのまま吸われたりちろちろと舌を這わされたりされている。

もしかしくなくても、変な気持ちになりそうで春歌は慌てた。

「あの、あのあの、あのっ」

呼びかけるも、真斗の口は忙しく返事は無い。一本の指が終わるとまた別の指と、春歌の右手は愛撫され続ける。

「はあっ……」

春歌の吐息が悩ましい物に変わって来た。ただ、指を舐められているだけなのに。好きな人にされているからだろうか、春歌は明らかに感じてしまっていた。

真斗は指を一本ずつ丹念にしゃぶり、右手の五本が終わると、次は左手を要求した。

「あつ、あのっ、でも……」

「嫌なのか？ ハル、これ以上の事も既にしているというのに」

「そっ、それは……っ」

春歌はかあつと顔に熱が集まって真っ赤になってしまった。以前、情熱のままに二人過ごした記憶がありありと蘇ってきたからだ。思わず目を泳がせている好きに、真斗は左手を取って、そちらの愛撫も開始してしまった。

あの時も、こんな風に真斗くんは優しくて、でも少し強引で意地悪で、と思い返すと快感は今まで以上になる。指が全て愛撫され終わる頃には、春歌の下着はぐっしりと濡れてしまっていた。

もじもじと居心地悪そうに居ずまいを正す春歌に、真斗が気付かない訳が無い。

「春歌……」

名を呼びながら、今度は唇にキスをする。ちゅ、と軽く唇を合わせた後、すぐに二人はお互いの舌を絡めあう深い口付けを始めた。

止められない。とても止められなかった。既に二人の身体には火がついてしまっている。春歌も、夢中になって真斗に抱きつき、首の後ろに両手を回し密着した。真斗も最初は同じようにしていたが、すぐにその不埒な手は春歌のブラウスの中へと、背中側から潜り込んだ。

「んっ……」

素肌を撫でられたそれだけで、敏感な春歌は反応してキスの合間に声を漏らす。真斗のその器用な指は、するすると背中を撫で上げた後、春歌の胸を締め付けている、ブラのホックをぶっんとはずした。

春歌は「ほうっ」と息を吐いてラクになった胸にホッとした。

最近、真斗と付き合うようになったからか、頓に胸が大きくなり締め付けをきつく感じていたのだ。真斗の指は、背中を数度なぞって撫でたかと思うと漸くブラウスの中から出て、今度は前に回ってしゅりとりボンをほどいた。

春歌ははっとしたが、キスをしながら次々とブラウスのボタンをはずしていく真斗に抗えない。それどころか期待で、触れられてもいないのに胸の先端は固く大きくなって反応していた。

真斗はボタンを全てはずし終えると前身ごろを開き、ブラを上には押し上げた。春歌の柔らかな乳房が誘うようにふるふると揺れている。真斗は迷わずに胸の先端に軽く唇を這わせる。たちまち春歌は反応して「ふあっ」と押し殺したような声をあげ、すぐに唇を噛んで声を抑えようとする。真斗はそんな春歌に声をあげさせたいと思い、愛撫を本格的に開始していく。

最初は、先端を舐め上げて。ひくり、と春歌が反応したのを確認してから、尖った舌先でつつくようにする。ちらりと春歌を見上げると、潤んだ瞳と赤い頬。明らかに彼女も発情してい

る。それが真斗には嬉しくてたまらない。堪らず胸の先端を口に含み、吸いながら舌で刺激すると

「んっ、はあっ……」

熱い吐息と抑えきれない声。真斗は更に、胸の先端に軽く歯を立てて甘く噛んだ。あくまでも痛くないように、刺激として。

「ああっ……！」

春歌は堪らず大きな声を出してしまった。真斗に触れられるのはどこもかしこも気持ち良い。その手も、唇も。声を抑えるのに必死だったけれど、甘噛みされると電流が走ったようになってとても我慢出来ないのだ。はしたない、と唇を無理に閉じようとする真斗がクスリと笑った。

「そのように、無理に抑えなくとも良い」

「えっと、その、恥ずかしくて……」

「俺しか聞いていない。大丈夫だ」

「……………」

だからそれが恥ずかしいのに、と春歌は思ったけれど言えなかった。春歌が黙っているのを良い事に、真斗は更に下半身にも手を伸ばしてくる。彼が太腿を撫で上げ、スカートの指を侵入させ、下着のステッチ部分に指を這わせる。そして春歌が既にびしょぬれの状態になっている事に小さく笑ったように、春歌は更に真っ赤になってしまった。

「もうこのように……ハルは濡れやすい体質のようだな」

「やつ、そ、それは……真斗くんが、そんな風に触れるから……」

「責めているのではない。俺は喜んでいなのだぞ」

「真斗くん、意地悪です……」

瞳を潤ませながら恥ずかしがってそんな風に言う恋人に、真斗の情熱は溢れ出そうになってしまふ。そこを理性の力でぐつと押さえ、強引にはならないよう、下着の上から優しく愛撫した。すりすり二度三度撫でてから、指で突起となつてい一番敏感な尖りをくり、と押して刺激する。

「はあっ、あっ、んっ……真斗くん、もう……いきそうです……っ」

「ふふ、本当に。ハルは感じやすいのだな」

真斗は既にびしょ濡れの春歌の下着を脱がせた。勿論春歌も協力して、腰を浮かせ脱ぎやすい体勢を取る。

そして、遮る物が無くなったためかみるみに浅く指を浸し、指を愛液で濡らしてからそつと指を動かしていく。ぬるぬると、壁やクリトリスの周辺を優しく触れていくとそのもどかしさに、春歌の脚は勝手に開いていく。動きに呼応して、勝手に腰も揺れ動いていくのだ。春歌のそんな反応が、真斗には嬉しくて仕方ない。

「ハル、腰が動いているぞ」

ついそんな意地悪を言ってしまう。春歌は恥ずかしいながら

も素直に答えるのだ。

「あっ、あっ、これは、勝手に……気持ち良くて……っ」

「では、これはどうだ？」

つふり、その優美な指を真斗は春歌の中に挿入した。指はたちまち熱く柔らかいぬくもりに包まれる。そして早くここに、自身を侵入させたいと強く思ってしまう。

「ふあっ……！ ここも、気持ち、良いです……っ」

「では此方とはどうだ？」

真斗は指で中を探りながら、同時にクリトリスもぬるぬると弄り始めた。先程からの愛撫に耐えて、すぐにでもいきそうだった春歌が我慢出来るわけがない。

「あっ、ああっ！ イっちゃう……っ！ ああああっ！」

腰を揺らし、真斗の指をぎゅうぎゅうと締め付けながら、春歌はあつさりと達してしまった。仰け反るように頂上へといつてしまった春歌を、真斗は抱きかかえ床に寝かせた。

はあはあ、と荒い息の春歌がとろんとした表情で見上げてくる。

ブラウスの前身ごろは開かれ、ずりあげられたブラからは胸が露出している。それに捲れたスカートからは濡れた褄とピンク色のそこが丸見えだ。

真斗はああ、と嘆息しながら春歌の脚の間に身体を割り込ませた。腿の辺りを持って脚を思い切り開かせると、顔をそこに

近付ける。そして春歌のそこに舌を這わせ、舐め上げた。

「あああつ……！ やつ、そこ……！」

「ハル、嫌なのか？」

「ち、違うんです……！ つ、今は、はっ、ああつ……！ 感じ、すぎて……！ つ、あつ、ふあつ、ああつ」

問いかけておいて答えを聞かずに、真斗はわざとクリトリスを舌で刺激した。いった直後で春歌がいつもより快感に弱くなっているのを分かった上での愛撫だった。春歌はこうされると、いつもより声をあげて夢中になるからだ。必死に声を抑えようと口を手で塞ごうとさえしている。その手を取って、繋ぐようにして抑え込んだ。それから舌での愛撫を続ける。春歌は腰をひくひくさせて感じながら嬌声をあげていた。

「ひあつ、あつ、やあ……！」

虐めるように、唇で挟み舌でちろちろと舐める。それからちゅうつと吸ってみた。春歌の身体は面白いようにびくつと跳ねて、声が一層大きくなる。その反応が愛しく可愛らしく、真斗は更に、わざとクリトリスを吸い続け快感を長引かせる愛撫を与えた。春歌は喘ぎながら身体を反応させていたが、そのうちまた腰を揺らし始めた。快樂が上昇していつてるのが見てとれる。泣きそうな声と淫らに揺らす下半身のギャップに、真斗も堪らない。

そして、そろそろ頃合いかと真斗は軽くクリトリスに歯を当

てた。胸と同様、少しの刺激が春歌の身体は悦ぶと分かっている行為だった。

「ああああつ！ また、ああつ……！ いくつ、やあああ……！」

かぶり、と甘く嚙むと予想通り、春歌の身体はすぐに頂上へと達してしまった。がくがくと腰を揺すり、真斗の髪をぐしゃぐしゃにかきまわしている。そして達しきると、力が抜けてくたり、と横たわってしまった。

後から後から蜜が溢れ出て来る其処を隠そうともせず、脚を開いてぼんやりしているその様は、うっとりしているようにも見えた。

事実、春歌は快樂の波間に漂って降りて来られないのだ。

「ハル……」

それでも真斗の呼びかけに、ふっと己を取り戻したようで春歌はのろのろと身体を起こした。未だに身体の中に渦巻いている快感で、はあはあと息が荒い。

「真斗くん、あの……わたしにも、させてください」

そして申し出たのは、奉仕だった。そう言つて、春歌は真斗の右手を取り、そのまま指を一本、口に含んだ。ちろちろと舐め、その唇で吸っている。

真斗がした行為、指フェラをお返しにしているのだ。

「は、ハルッ、それは……ッ」

真斗は眉間に皺を寄せて耐えようとした。が、春歌が小さな口で賢明に奉仕しているのを見て我慢できる訳が無い。欲望のままに、ベルトをはずし自身を取り出す。先端が欲望の雫で光っていた。真斗はそのまま春歌の滑らかな手を自身に導いた。

春歌は素直に従って真斗のペニスにそつと触れたものの、それだけで何も動かない。手への奉仕で必死になっているからだ。

こそばゆいような、それでいて快感を得られる指への愛撫を丁寧になされ、ペニスにはそつと触れられるだけ。漸く片手の指への奉仕が終わった時、真斗は手を引き抜いて苦しそうな声を出した。

「もういい、指は……ハル……」

「そうはいきません」

「しかし……」

「わたし、ちゃんと頑張りますから。だから、最後までさせてください」

変なところで頑張り屋な春歌のスイッチが入ってしまったらしい。そう言って、引き続きもう片方の指への愛撫を開始する。

「……っ、我慢の限界だ」

「え」

「許せ、ハル……ッ」

「あっ……」

真斗の情熱がついに溢れ出た。彼は春歌を押し倒し、脚を広げて充分に潤っているそこに己を宛がった。そして、ゆっくりと自身を侵入させていった。

「……ッ、くっ」

「はっ、はあっ……あっ、ああっ……」

既に知ってはいるが、春歌の中はきつくて包み込まれるようにとろけている。真斗はあっという間に果ててしまいそう歯を食いしばりながら、最奥まで何度も出し挿れを繰り返しながら突き上げていく。あくまでも春歌に痛みを与えないよう慎重だった。そして最後まで挿れると声をかけた。

「はあっ、全部、入ったぞハル」

「あっ、あっ……真斗、くん……っ」

「ハル……ッ！」

再び真斗が情熱に支配される。腰を突き上げ、ぐちゅぐちゅという音を立てながら春歌を責め立てた。出し挿れの度に水音と春歌の喘ぎ声と、真斗の息遣いが聞こえる。

春歌は喘ぎ、腰を揺らしながらもぎゅう、と真斗にしがみついてきた。それが愛おしく、堪らなくなつて真斗は腰の動きをそのままに唇へのキスもした。その途端、春歌の中はきゅうつと締め、真斗のペニスは得も言われぬ快感に包み込まれた。たまらず、腰の動きを速める。

「んっ、うっ、まさ、と、くん……っ」

「はあっ……ハル、ハル……っ！」

春歌も、真斗が出して、挿れての動きを繰り返すとお腹の内側から快感が高まって全身に広がって行く。もう達した筈の身体は快楽に貪欲で、潤いに浸るように、蕩けそうに気持ち良い。

それでいて、ジェットコースターに乗っているような浮遊感もある。気持ち良さは真斗に突き上げられる度に高まる一方だった。

「あつ、ああつ！ きもち、いいですっ……ああ……！」

「俺もだ…… ああ、愛おしい……ハル……ッ」

ぎゅうと互いに抱き合いながら、絶頂へと高め合って行く。

溶けて、頭が真っ白になりそうだった。そして、頂上へと同時に達し、春歌は更に真斗を締め付け、真斗は春歌の中に欲望を思う存分に放ったのだった。

はあ、はあという二人の荒い息が部屋を満たしている。

くったりと力が抜け、目を瞑っている春歌に真斗は声をかけた。

「ハル、大丈夫か？」

そして春歌の頬に手を伸ばしそつと触れる。

春歌はふつと目をあけて、まばたきをして視点を合わせた。

そして、頬に触れている真斗の指に気付いた。反射的に思った

のは、さっきの続き、だった。その手をすつと取って口に含む。ちらり、見上げると真斗は目を見開いていた。そして、放ったばかりでまだ春歌の中に居た彼自身がむくむくと大きくなるのを感じた。

「あつ、ん……っ、真斗くん、また……っ」

「ハル……、今度は、ゆっくり……」

二人は見つめ合い、先程とは違ってゆっくり、ゆっくりと動き出す。

しかし、すぐにまた夢中になって激しい愛になるのは時間の問題だった。

おわり

Make love Songs





ねまきでオフ! / 花沢

砂月くん

大好きです!



大好きです、
砂月くん

好きです

本当に、大好きで



突然なんだ

突然じゃ
ありません
いつでも
大好きです

そういう意味じゃ
なくて脈絡がないって
意味だバカ

オフ。





ひゃ、
つきく……

はぁっ……

キスだけで何そんな
モノ欲しそうな
顔してんだよ

まだまだこれから
だろう？

ひゃあ!!

わあっ

砂月くん……!

煽ったのは
お前だろ？

す。

やっ

クルクル



違います、こ、
こういうことが
したいんじゃないっ！

さ、

あっ…

ちゅ

ちゅ



んな
気持ち良さそうな
声だして、何
言ってるんだよ

乳首
たってるぜ？

そ、
それは

砂月くんがっ

んん

きゅっ

んあっ

んん



そうだな
俺が
こうしたん
だよな

っ…

ちがつ…
違うんです

砂月くんは…
その、

あまり「好き」だと
口ではいわないので

聞いてみたかった
というか、す、少し
不安になってしまって…

ど、どうした突然

無理矢理で
怖かったか

違うんです

我儘を言って
すみません…っ
少し欲張りに
なっていました…

私が、

馬鹿、



俺は
好きでもない女に
こんなことは
しない！

は——っ！



は

あ……

……まったく、たった
アレだけでこんなに
しやがって

ぐちゃぐちゃじゃ
ねえか



反則だ

タコ

ま
や
?!?

きん

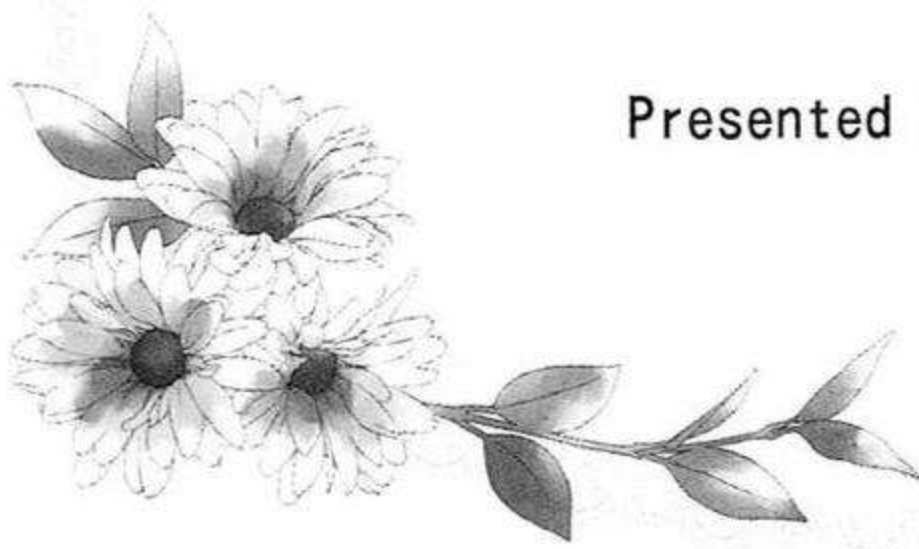
あ、あ、あ

ん



あなたと僕と星占い

Presented by マキビ



春歌は非常にハラハラしていた。というのも、彼女の愛する恋人が、とっても悲しそうな顔で帰ってくるのではないかと思つていたからだ。

しかしその予想に反し、玄関の扉を開けた先の恋人：：四ノ宮那月の表情は穏やかで、しかしどこか真剣な雰囲気醸し出していたため、春歌は戸惑つて首を傾げる。

「那月くん、おかえりなさい。あ、あのう」

「ただいまハルちゃん。早速なんですけれど」

春歌は心配に思つていたことを、躊躇いつつも尋ねようとしたのだが、その途中で那月が口を挟んできたためそれは叶わなかった。次いで那月はスツと、春歌に向けて手を差し伸べる。綺麗な長い指、肉の少ない大きな掌。無意識に近く、大好きなそこへそつと、春歌は自らの手で触れた。

「僕と一緒にいてくれますか？」

「え？ はい、それはもちろん：：？」

彼の唐突な言葉は更に春歌を戸惑わせるも、改めて言われずとも彼女自身もそうでありたいと思つていたので、そうお願いされて断るわけもないのだが、どうして今そんなことを那月が言い出したのか、不思議に思いつつ春歌が頷けば、パアツと那月は明るい笑みを浮かべた。

「良かった。それじゃあ早速ですがハルちゃん、僕の部屋に行きましようっ！」

「え、えっ：：！？」

重なった手を握つてそのままひよいと、那月は

春歌を軽々と横抱きにしたため、彼女は思わず那月の首にしがみつく。彼に限って振り落とすことなどないだろうけれど、条件反射は致しかたない。春歌が気づいた時には軽い振動と共に、那月の部屋のソファへ一緒に腰掛けさせられていて。

流れるような展開にやや置いていかれていた春歌だが、このままでもいいけないと、じつと眼鏡の隙間から覗く那月の柔らかな色合いの眼を見つめた。にこにこ上機嫌な那月は、そんな彼女の視線を受けて、ことりと小首を傾げてみせる。

「那月くん、あの、なんというか……大丈夫ですか？」

「はい？ 大丈夫、というかと？」

「今日の番組で、那月くん、なんだかと……大変なことを言われていたじゃないですか。だから私、心配で」

本日那月はアイドル仕事の一つとして、とある生放送のテレビ番組に出演していた。その番組内のコーナーで、今をときめく人気占い師が那月のことを占ったのだが、その結果がなんとも衝撃的なもので。

“一ヶ月間ずーっと不幸に見舞われるほど、運勢が最悪”

……と。那月はその占い師から宣告されたのだ。言われた当人である那月以上に、一視聴者である春歌も驚き、画面に食い入りながらその占い師

による運氣アップの秘訣を聞いていた。規則正しい生活というアドバイスに神妙に頷いてみせる那月のアップを見ながら、それって普段と変わらないじゃないですか……と、春歌は落胆を覚えるとともに、彼の無事を祈り続けていたのだが……。

そうか、ハルちゃんはあるを見てくれていたんですね、と那月は合点がいったように呟き、春歌の腰に回した腕の力を強める。にこりと笑うその顔に無理がないかと、様子を探ってみたがいつも通りのようで、春歌は少しだけ胸の内の強ばりが溶けたように思えた。

「心配をかけちゃってごめんね、ハルちゃん。でも、運勢が悪いといっても、今のところそこまで大変なことは起きてないんですよ」

「えつと、それなら大変ではないことは起こった、と……？」

「ええ。朝からおかしいな、とは思っていたんですけど……本当に、なんだかちよっと運が悪いなあって思うことが起き始めたんです。今日はずつと、道路を渡ろうとする度に直前で赤になられたり、買おうと思った飲み物が売り切れちゃったり、つたり、割り箸がうまく割れなかったり……」

「それは……」

大事には至っていないが、確かに小さな不幸が起こり重なっているようだ……不幸と呼ぶには首を傾げるものもあれど。

しかし、今後もつと大変な目に遭ってしまったら。そう考えれば心配で心配でたまらないと、そ

の気持ちがあるまま彼女の顔に表れてるのを見て取った那月は、少しだけ眉を下げる。

「僕だけに何か起きるならいいんですが……もしも、僕の周りの皆さんにまでご迷惑をかけたらと思ふと、それはとっても怖いのです。」

でもね、先ほども言いましたけど、大丈夫なんですよ。不幸にならない方法を、ちやあんと聞きましましたから！」

「あの占い師の方が言ってたことですか？」

「いいえ。お星さまが教えてくれたんですよ。」

「……お星さまですか！」

那月によると、占い師に下されたアドバイスはもちろん実践するとして、それでも不安を感じてしまつてこれからどうしようかと困っていた帰り道のこと。夜空を見上げたその先で、きらきらと輝くそれらがアドバイスしてくれたのだという。そう言つてはわんと微笑む彼に一瞬呆氣に取られた春歌だったが、なんてロマンチストの那月らしいことなんだと思へて、彼女もふわりと表情を緩めた。

「お星さまから、なんて教えてもらつたんですか？」

「ええとね、『大好きな人とずうずうつと一緒に過ごすと運気が急上昇デースッ！』 H A H A H A
『せいぜい励めばイイノデース！』と」

……どこかで聞いたことのある口調の星のようだが、なるほど星に占つてもらつた結果を実践し、那月はああ言つて春歌をここへ連れてきたという

ことか。それはつまり、春歌は那月に、大好きだと思われているということ……春歌は気恥ずかしさとそれ以上の嬉しさに、ほんのりと頬を赤らめる。

「ちやうど仕事もひと段落ついたところ……」

「私で役に立てるなら、頑張りますねっ！」

「ありがとうハルちゃん……！ 大っ好きですうっ！」

ぎゆうぎゆうと那月に抱きしめられ、その力の強さが少し苦しかったものの、愛しい温もりに包まれて春歌は幸せな気持ちになる。

それから二人はびつたりと寄り添いながら談笑し、ご飯を忘れてはいけなと夕飯を食し、交互に入浴することにしたのだが……

——ガシャーン！

「……ガシャーン！」

一緒に風呂と那月には言われたものの、さすがにそれは……と春歌はやりわり辞退し那月を宥めつつ、先に入浴を済ませた。そしてその後、那月がバスルームに入つていったところ、何やら物をひっくり返すような音が断続的に響き始めて。春歌は心配になつてバスルームに向かい声をかけたが、大丈夫ですよと言われてしまい、それ以上何も言えずにリビングに引き返してきて痛感した。——これは、本気で、那月の運勢が悪いのだと。それだというのに、ほかほかと湯気を立てて出てきた那月は常の通りのこやかさだったため、春歌は尚のこと私にやれることは全てやらなければ

ば……！と決意を新たにしたのだった。

月の体にすっぽり包まれるように抱きしめられて、春歌は顔を赤くしながらもじもじしてしまふ。沁みてくる彼の温もりが心地良くて、けれどゆっくりと背をさすられるその感触には、肌が粟立つよううな。その先を期待するよううな、心と体のざわめきを覚えるのだ。

もう付き合い始めてそれなりの時を経て、かつ、那月とはとうに心も体も繋げていて。しかし今夜もそうしてしまふのは、那月の仕事を思えば躊躇われるものだった。

「あ、の……明日、早いですよね？」

「ええ、だから今日はこのまま……本当はいつもみたいに、もっともつとあなたといっぱいキスをして、くっついて……ハルちゃんのココに、入りたいですけれど」

「っひゃ！」

「そしたら二人で、お寝坊さんになっちゃうかもしれないからね？」

「つっ」と那月の指に、ショーツの上から秘所を撫でられ、春歌はぞくりと身を震わせた。それだけでじわりと腰の奥が疼いて、そうと悟られるのに怖じ気づいた春歌は身を振る。

「なっ、っ那月く……」

「あんまり可愛い顔しないで……？止まらなくなっちゃうよ」

「可愛いかどうかなんて春歌自身には分からない

けど、でもそうさせているのは紛れもなく那月なのに、その言い方はずるいと春歌は思う。しかしこれ以上那月がことを進めようとしなければ、その方が春歌としては都合が良いわけで。気を取り直して、春歌は首を伸ばし、那月の頬にそつと、一つだけキスをした。驚く彼を見ているのは恥ずかしいので、春歌は那月の首筋に顔を埋め、おやすみなさいとやや上擦った声で就寝の挨拶をする。

「……おやすみ、ハルちゃん」
那月からも小さな声が返ってきて、大きな手がやわらかく春歌の髪を梳いてくれる。その甘い感触に身を委ね、ふんわりと落ちてきた睡魔に春歌は意識を揺蕩わせた。

× × × × × ×

——朝を迎え、春歌は一度自室に戻り外出支度を済ませてから、また那月の部屋に戻った。まだまだ眠たそうな顔をしている那月をなんだか可愛く思いつつ、さて一緒に過ごすということは……と、鞆を手にした那月に春歌は問いかける。
「えつと、現場にも一緒に行つて良いのでしょうか？」
「はい。早乙女社長にもちやあんと許可はもらつ

たので大丈夫ですよ。僕の付き人さんになつたつもりで、ね？」

「分かりました、がんばりますっ！」

そうして事務所寮を出てから、二人はタクシーを拾って那月の仕事先へ向かうことになった。順調にいけば車で三十分もしないはずの道程なのだが、みるみる内に、タクシーの速度が落ちていつてしまう。

「……進まなくなつてしまいましたね」

踏切が近いわけでもなく、渋滞など普通ならありえないような一般道のはずが、なぜか前後左右といつの間にか車がひしめいている。とうとうびたりと止まつてしまつた車内で困惑の声をあげる春歌に、那月はそうですねえと同意しつつ、ふと考えるように顎に手をかけた。

「……ちよつとごめんね、ハルちゃん」

「はい？ あ、きやつ」

那月が春歌をひよいと膝の上に乗せると、視界の変化に春歌がやつと慣れた時には、軽い振動と共にゆつくりとタクシーのタイヤが回り始めた。

「あ……動き始めました！」

「ふふっ、やつぱりこうしてくつついてないとダメみたいですねえ」

頬ずりされる感触にくすぐつたさを覚えつつ、ああこれも不幸の一つだったのかと春歌は気がつく。

車を降りてからも離れようとはしない那月に、さすがに人目もあるからこれ以上はよろしくない

と、そう言つて三歩ばかり、春歌が彼から距離を取つた時にもまた、新たな不幸が那月を襲つた。

「那月くん、危ないっ！」

「ッ！ おっと」

急に影がさしたことを疑問に思い見上げた空から、落下してきたのは一つの植木鉢。とつさに春歌が叫べば、すすつと動いた那月の背後でそれが砕け、地面にばらばらと土と陶器の破片が散らばつた。青ざめた春歌とは対照的に、那月はいたつて冷静にぼつりと呟く。

「……マンションの上の方から落ちてきましたね。ハルちゃんに怪我がなくて本当に良かった」

「わた、私のことより那月くんが……！ こんなことが続いたら、那月くんが危ないです！」

「ふふっ、大丈夫ですよ。あなたがこうしていてくれれば」

「そう言つた那月に手を握られ、春歌もまたぎゅ

つと彼の手を握り返す。タクシーの中でのことを考えれば、こういった接触で少しでも那月の不運が避けられるならば、春歌はいっその手をあげてしまいたいと思つた。

「でも、ずっとこのままですと、撮影の時とかどうすれば……」

「撮影の時だけは仕方ないですけど、それ以外はなるべく……うーん……よおし、じゃあハルちゃん

は僕らの背中に隠れちゃいましょう！」

「はい？」

那月の言葉の意味はすぐに判明する。撮影スタ

ジオに到着し、那月が吸血鬼の衣装で幾度となくカメラのフラッシュを浴びるのを見守って（幸いなことにこの時間には特に問題は起きなかった）、そして次はこのまま雑誌のインタビューだ、という時。二人の他に誰もいない楽屋で、彼は春歌を手招きしたかと思うと、羽織っているマントの中へと春歌をすっぽり隠してしまった。

「那月くん、まさかこのままインタビューをつ？」
「ええ、多少もこもこしてやるように見えますけど、前をしっかりと閉じれば外からハルちゃんは見えないでしょう？」

「で、ですがこれはとっても怪しまれちゃうのでは……！？」

「僕が誤魔化しますよ。だからハルちゃんは、しっかりと僕に後ろから抱きついてくださいね。」
「任せてください、と那月に力強く言われてしまえば、それ以上春歌は言い返すことが出来なくなる。そうして那月の背中に隠れたまま、おぼつかない足取りでついていき、インタビュの席では椅子に浅く座る那月の腰に、体を巻き付けるようにして。マントに包まれて何も見えない中、那月以外何も分からないまま、ただ彼に密着して……こんな状況に、春歌は極度の緊張とそれ以外の胸の高まりを覚えて、ぎゅっと那月の服を握りしめた。

（どうしよう……すごくドキドキします）

昨日だって那月とは抱きしめ合って眠ったけれど、それとは違い今は周囲に沢山人がいて、春歌

がここにいると知れたら大変なことになってしまふ。それでも、那月の背に耳をつければ彼の声に息づかい、心臓の音が全て聞こえてきて、どこか春歌を安心させてくれる。大好きな大好きな那月と、こんな時まで一緒にいられることが、やはりどうしようもなく嬉しく思えて。

（那月くん……このドキドキが、全部伝わっちゃってる気がする……）
そして奇跡的にインタビューも無事終わり、楽屋に戻ったところで、春歌は一旦マントの中から出た。そこで振り返った先の那月の顔に浮かぶ、焦燥の色によく見覚えがあつて、どきりと春歌の心臓が跳ねる。そつと腕を掴んでくる彼の手がとて熱かった。視界の端に見える、那月のズボンを押し上げているものの存在に、春歌の顔にもじわじわと朱が上ってくる。少しだけ、彼女のショーツに滲み出るものがある。

「帰りましたよう。急いで帰りましたよう」

「……はい」
これ以上ないほどの、那月の真剣な表情に頷いてみせ、この後の予定を思い描く。もう仕事は入っていないとしっかり確認してから、春歌は那月の後をついて出て、楽屋の扉を閉じた。

× × × × × × ×

「あつ、あ、那月く……！　せめてベッドまで……」

「そこまで待たなきゃ、ダメ？　僕ね、ずっとハルちゃんにくつついてもらって……あなたあの体の柔らかさや、吐息にすっごくドキドキして……ハルちゃんもドキドキしてるって分かってたから、早く繋がりたいくてたまらなくなっちゃったんです」

もう我慢出来ませんと、那月の部屋、リビングへ足を踏み入れたそこで春歌は彼に押し倒される。ちゅ、ちゅと春歌の顔にキスの雨を降らせる那月は、手早く春歌のスカートを抜き取ってショーツの縁から指を滑り込ませた。

「もう、ぬるぬるしてる……ねえ、ハルちゃんも早く、したくないですか？」

「あん、あッ……それは、その、ンッ」

ちゅくちゅくと濡れた花卉をかき混ぜられ、春歌はあはあと熱いため息を零す。性急に求められるのは嫌じゃないが、固い床に背がぶつかるのはやはり少々痛くて、「せめてソファの上が……」と弱々しく彼女は懇願した。頷く那月に横抱きにされ、ソファに座った彼に体勢はそのまま服を剥がれる。ブラまで取り去られ、隠すもののなくなった身の恥ずかしさに、春歌は胸と下生えを腕と手で覆った。

那月はそんな姿まで可愛くて仕方がないと微笑

みながら、春歌の体を起こして自分の膝を跨がせるようにして抱きしめる。耳の裏側に唇を寄せ、

「那月はうっとり囁いた。耳の裏側に唇を寄せ、」

「でも、ほんとにハルちゃんはすごいです。インタビューの時も誰にも怪しまれませんでしたが、昨日は一苦勞した帰り道だつてすごくスムーズに動けましたし。」

「……あなたはミューズですけれど、幸運の女神様でもある。本当にすごいや」

「そんな、限りなく畏れ多いです……」

「なにせ春歌はただ那月と一緒にいただけで、全くもって何かをしたわけではないのだし。現在の自分の格好もふまえ、色々な意味で居たたまれな

くなりつつ、けれど、と春歌は那月の首の後ろへと腕を回す。

「那月くんのずっと傍にいられて、私とても嬉しかったです。不謹慎な気がしますが、でも、お仕事中の那月くんにあれだけ近づけたのは、初めてのことでしたし……そのことでもしも、少しでも

那月くんを守ることが出来ていたなら。那月くんのパートナ―としてちよつとでも役立ててたなら、

本当によかったなつて思います」

「ハルちゃん……ッ」

春歌の言葉にきゅんと胸が高鳴ったらしい那月は、可愛くつてたまらない！と力強く細い体を

抱きしめる。胸の頂きが那月の服に擦れ、甘い痺

れがそこから春歌の背筋を広がった。

「ん、ン、あッ」

「ん、ン、あッ」

「ん、ン、あッ」

「ん、ン、あッ」

「ん、ン、あッ」

「ん、ン、あッ」

「ん、ン、あッ」

「好き、大好き……ッ春歌、はるか」

キスの合間に呼ばれる名前も、大きな手が性感を高めるように体を撫でるのも、春歌には全てが気持ちよくてたまらない。舌を絡め取られたかと思えば次には上顎をべろりと舐められて、むずがゆさにくうと春歌の喉が音を立てた。自らの下半身の衣服を緩め、固く熱く屹立したペニスを取り出した那月は、春歌の腰をぐいと引き寄せる。蜜を滴らせた春歌の花弁に、ペニスの先端が押しあてられた。

「もう、挿れるよ、痛かったら言つて……ッ！」

「はいっ……ふ、うあッあッあッ！」
遅しいペニスに貫かれる衝撃を、嬌声と背を反らすことでどうにか受け流す春歌に、那月もぐつと息を飲み込んだ。最も太い部分を受け入れる時に軋んだ膣壁も、そこを過ぎれば柔軟に熱塊を受け止め、きゆうと締め付けてきて。彼女の内に包まれ、繋がった互いの性器からとろけそうな快感を得て、那月はあど湿ったため息を零した。息の整わない春歌の戦慄く唇に、ちゅつとバードキスを落とす。

「気持ちいい？ 春歌……」

「はあッ、あ、あッ、ん、ツきもちい、で、ツ……う」

「よかった、もっと気持ちよくなろうね……ッ！」

「ひっあ、ンあ、アッ、あ！」
がっしりと腰を掴まれ、上下に揺さぶられる。那月の首に腕を回ししがみつきのながら、春歌もま

たより感じるところをペニスに突かれたくて、くねるように腰を動かした。その度に小さく蠢き、時にきつく締まる膣壁に那月は眉を寄せる。

「いっイっちゃ、あ、那月く……もう……ッ！」
「僕もです、あ、一緒にイこう……春歌、はるか、ッう！」

やがて限界を感じ、春歌が達した絶頂にきつくきつくペニスを食まれ、那月も吐精する。

噴出する熱い飛沫と彼女の愛液で、胎内も足の間もぐしよぐしよに濡れ、少し身じろぐだけでぐちゆりと音は絶えない。

高まって突き抜けて、そして放心するようになるとんと落ち着いて。春歌はぼんやりと、彼女の首元で深呼吸する那月の横顔を見つめた。

「那月くん……大好きです」

「っ、僕も、愛してます……ずっとずっと、あなたと一緒に過ごしたい。今日が終わっても明日になっても、あなたとこうして繋がっていたい……」

繋がりが合ったまま交わすキスにもまた互いの胸を満たしながら、二人の夜はこうして、快楽に落ちながらそれでも穏やかに過ぎていった。

その後、宣告された期間よりもずっと早く、那月の運勢は回復したのだが。また離れて過ごすことを決めた那月が、そうと言わずにずっと春歌を独占していたため……結局一ヶ月あまり、彼らの蜜月は続いたのであった。

F I N

ONLY WORLD

天音真理

んっ

ん…んんっ

春歌
何故声を抑えるんです

だ…っ

んっ—

んんんん

—！

……強情ですね

なら……

ひあっ

びん

あっ……

アッ



はっ♡

はぁっ

いちのせさ……っ
ど……して……っ
そ……な……



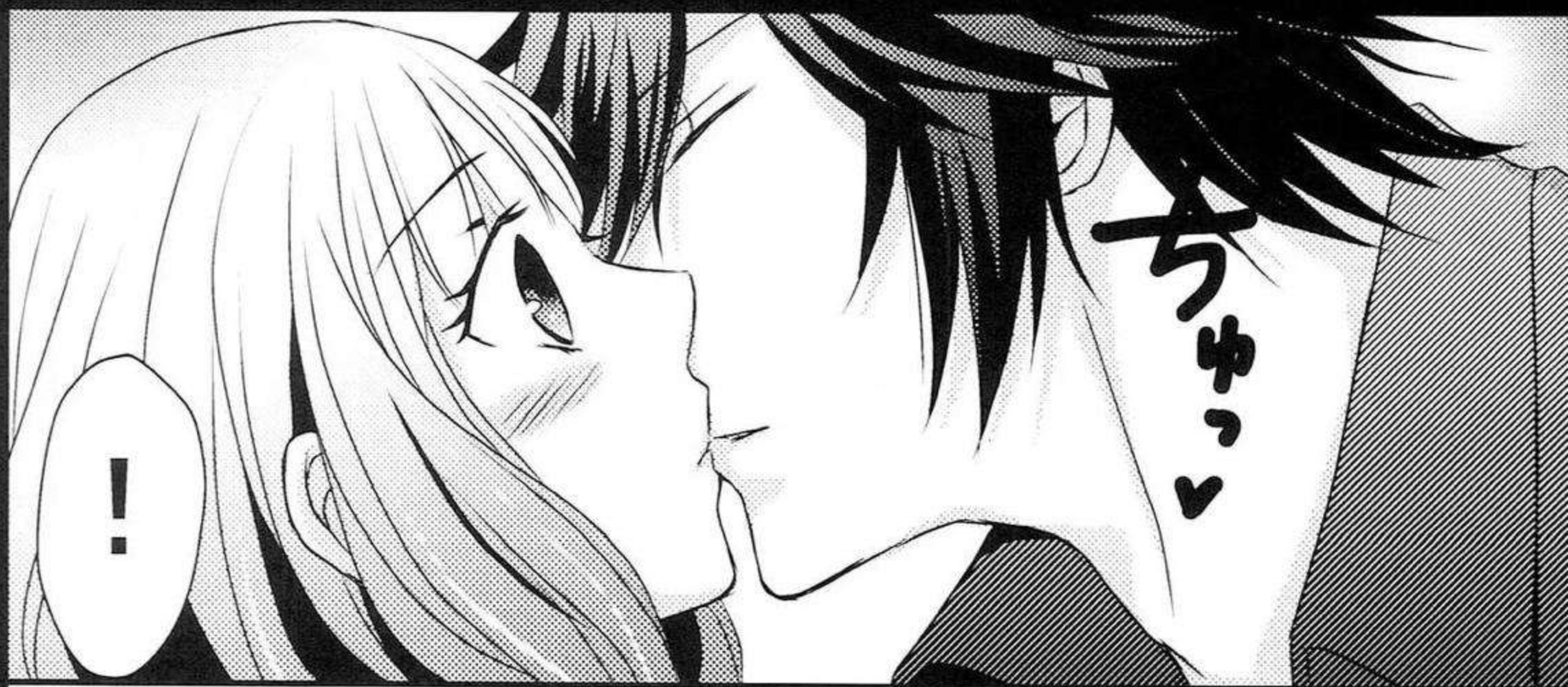
どうです？
声を聞かせる気にな
りましたか？



……



先程
何故…と聞きましたね



君のこんな声を
聞けるのは
私の特権だからです

Fin.



あ、あの……
一ノ瀬さんっ……

→ 不可抗力の可能性とは。

あま、
着替え終わりましたか？

春歌

はい……

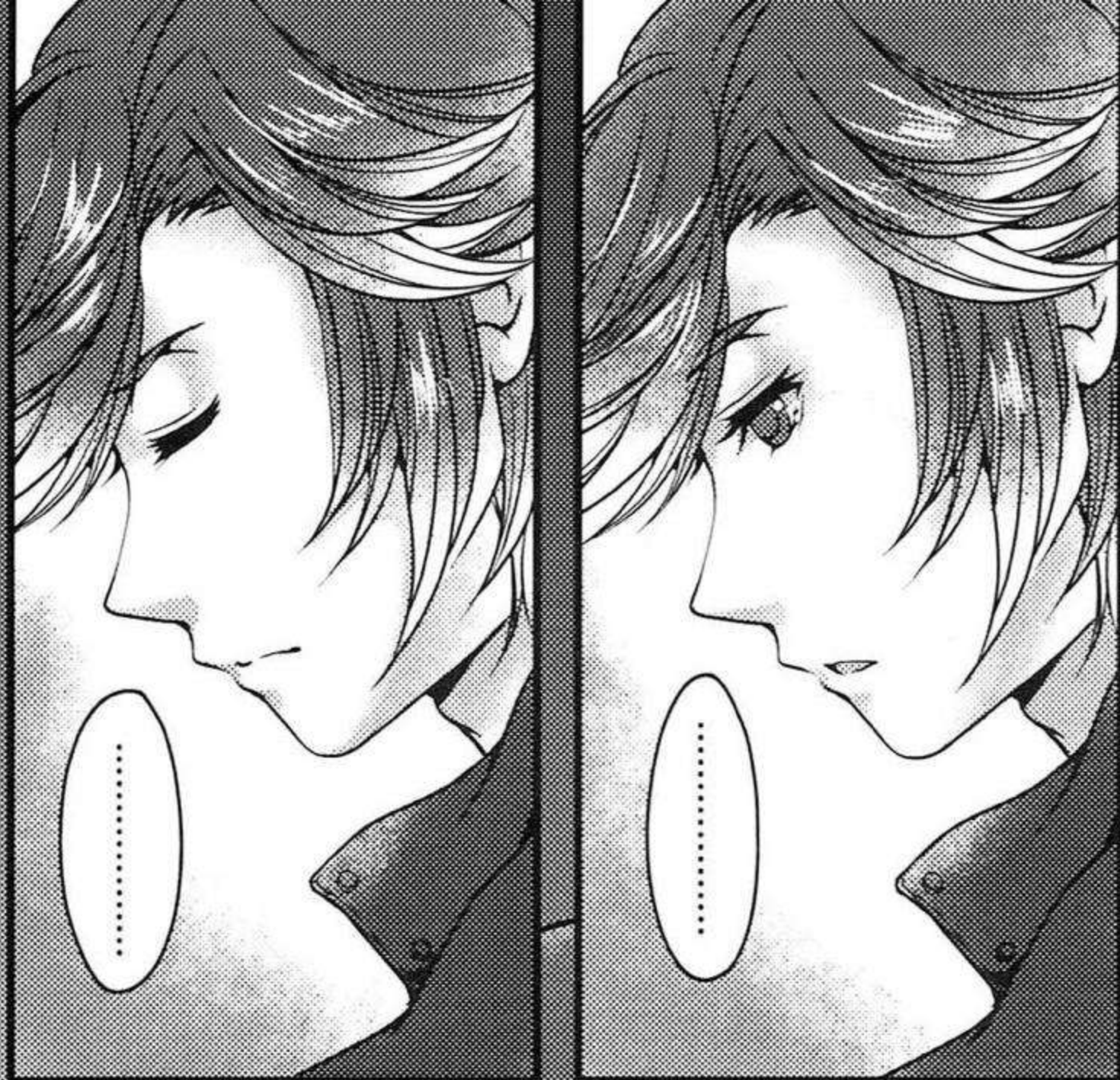
すいませんでした
お茶をこぼしたばかりに

あ、そのっ

いえ、良いんですよ

ササギさん、
良かったです

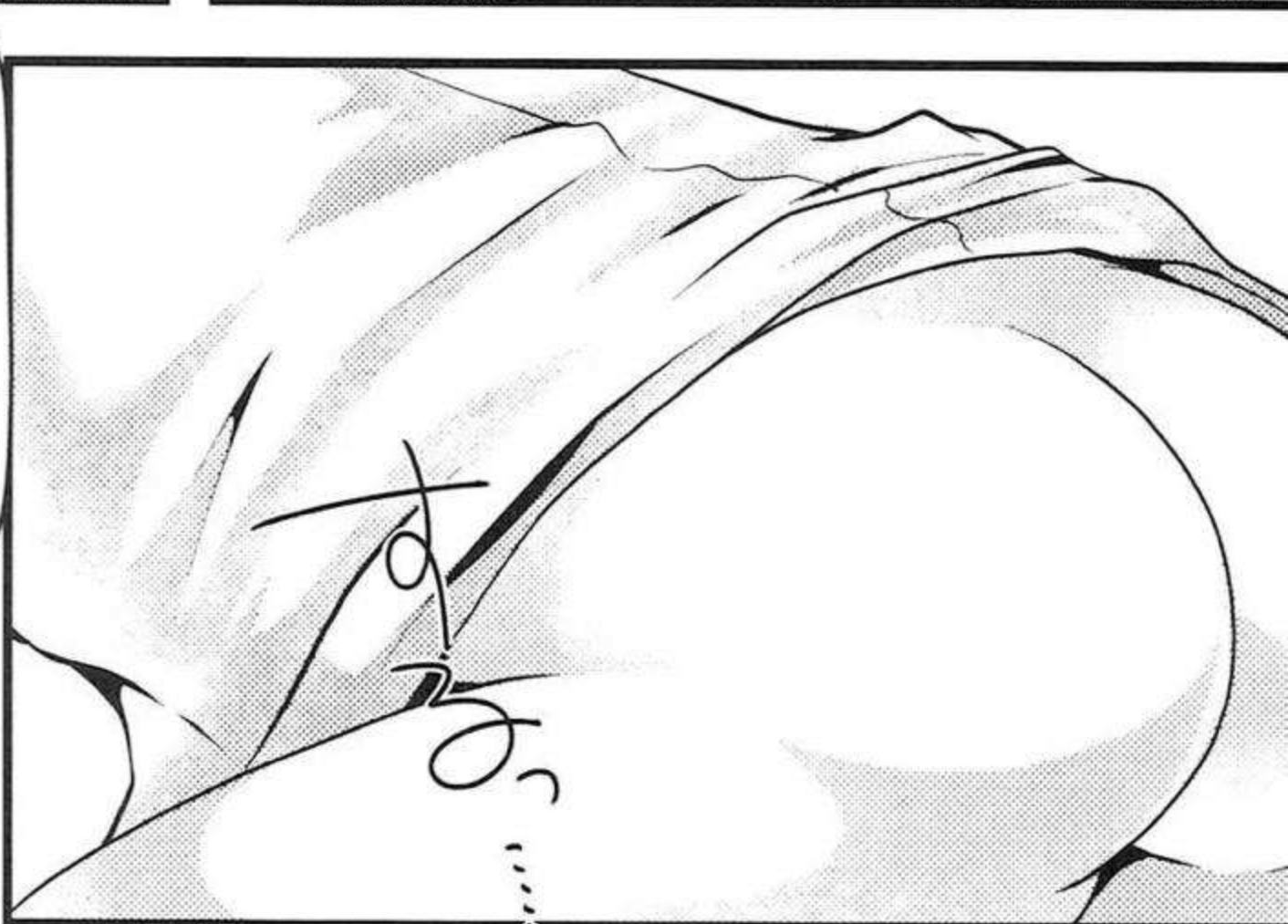
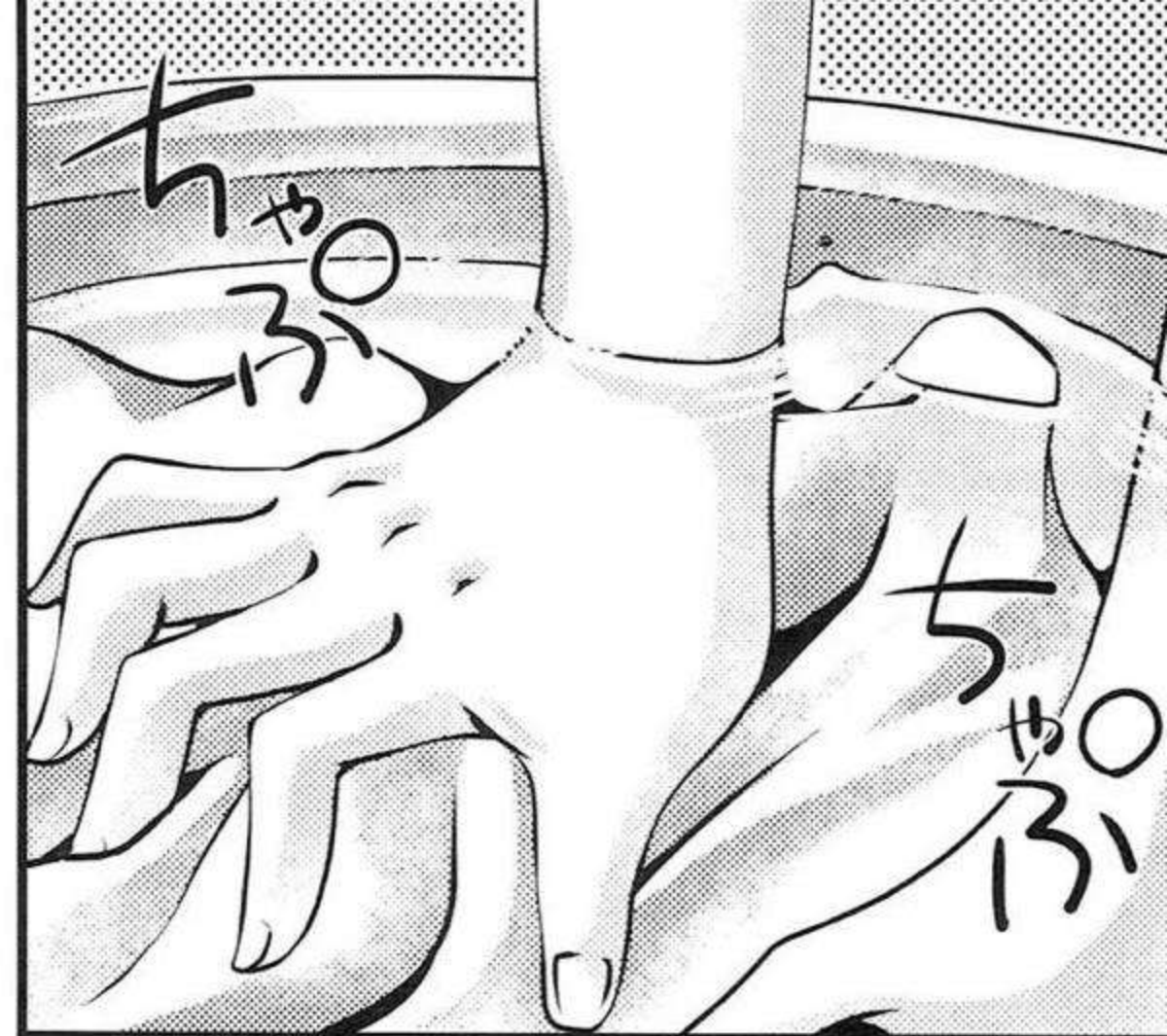


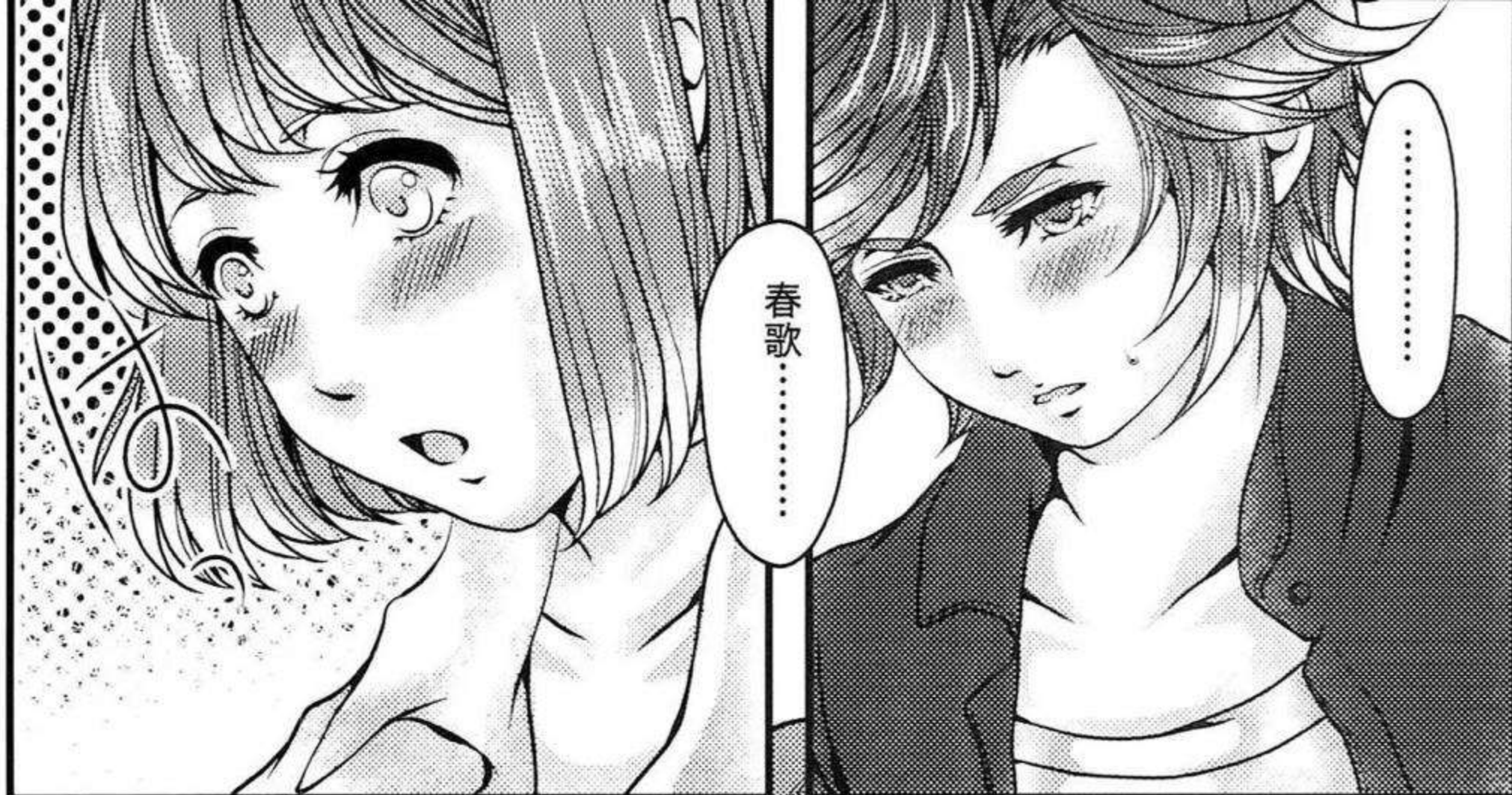


遅いですね……

春歌

終わりそうですか？
無理そうであれば早めにクリーニングに……





春歌………

………



あつ、一ノ瀬さん

どうかしましたか？



……落ちそうですか？

ちやうどいん

はいっ！
一ノ瀬さんのおかげで染みに
ならずすみそうですっ！

そうですか

それは良かったです



しかし……

えっ

一ノ瀬さん……

まったく

そのような格好をして
私を誘っているのですか？

ひあっ



ふふ、可愛いですね

あっ



あの、わたし……
そんなつもりじゃ……！

そのような姿をして
誘っていないとでも？

だ、だってこの服は
一ノ瀬さんが……！

ふふ

ふふ、可愛いですね



ほら、背後が隙だらけですよ？

あ、

やめてっ
やめて……くださいっ

ふあぁ♡

どうしてです？
こんなに柔らかいのに

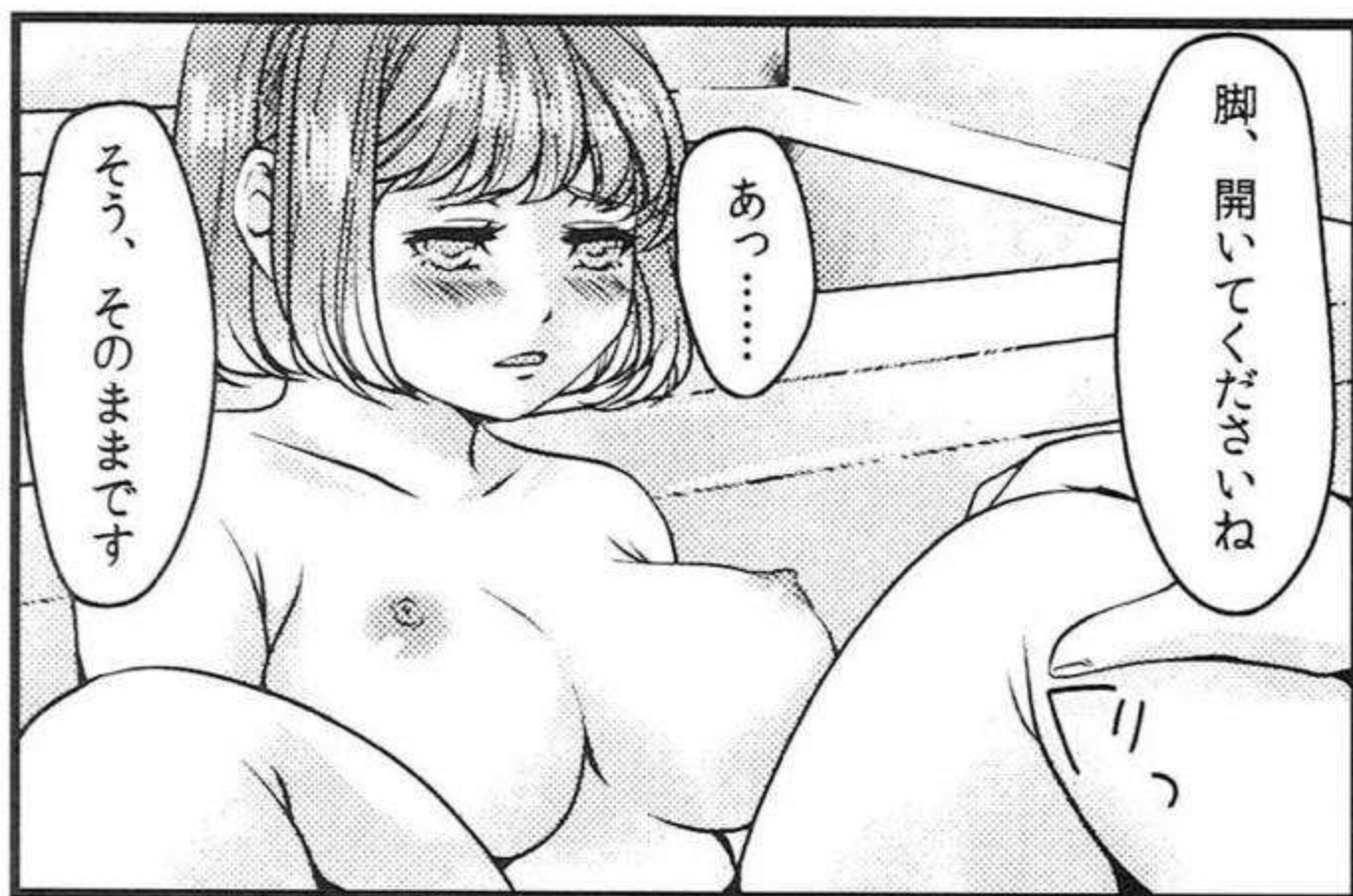
あ、

君のせいですよ春歌

私を駆り立てた以上
責任は取らないといけませんね？

だってっ……







おや、私の指を咥えて
離しませんよ？
いけませんね春歌

あ、



ほら……

私の指が
こんなに濡れて……

やだ、



それに、

物欲しそうにして……
そんなに欲しいのですか？



差し上げますよ

私を

スッ

君に全部

あ、

ふあああー♡

あ、いたっ



背中……痛そうですね……

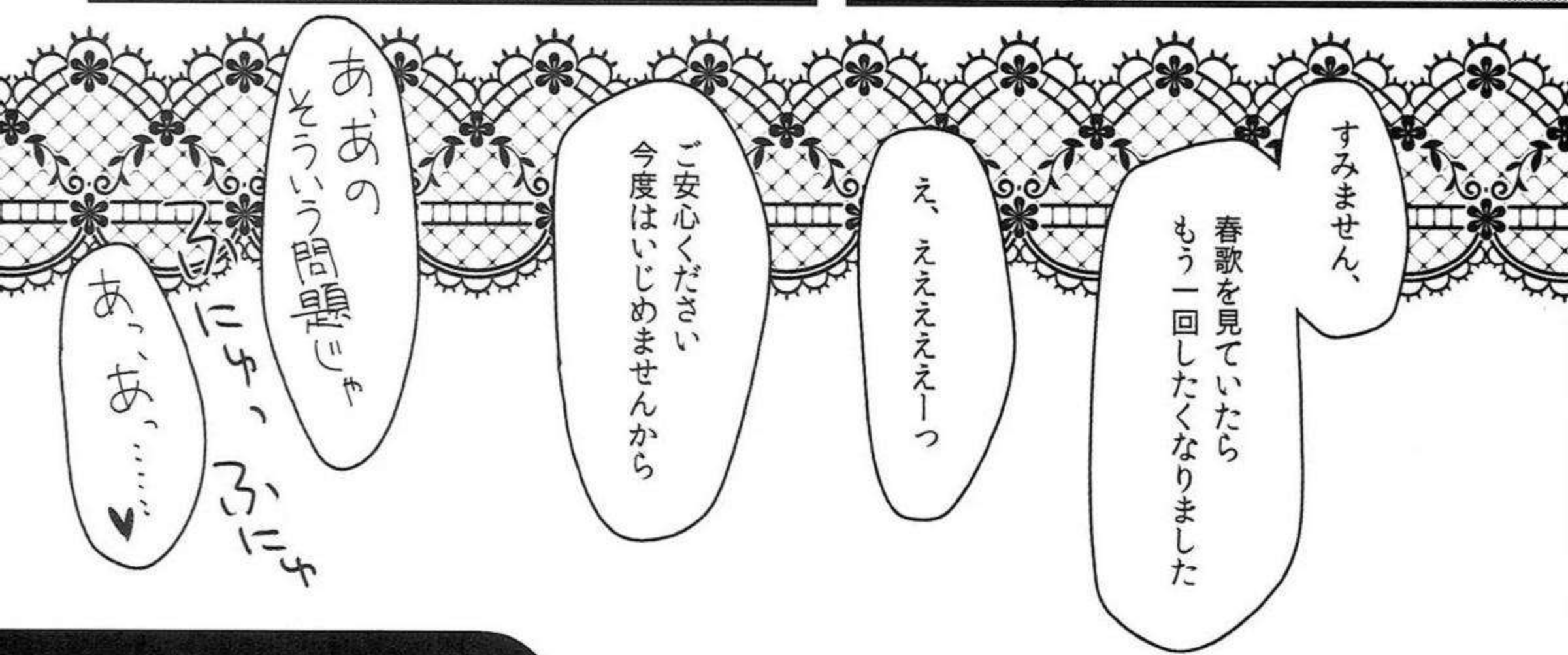
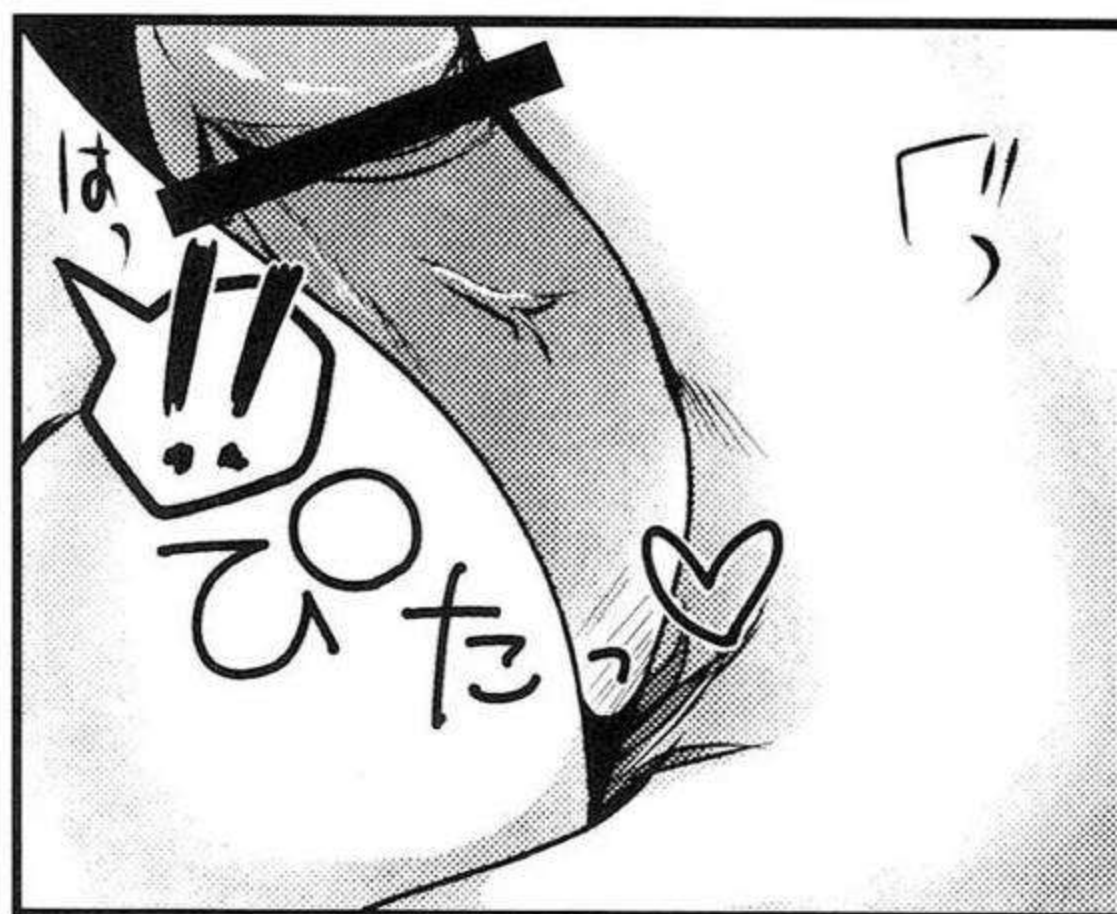


最高ですよ……春歌

君の膣内、包まれている
ようです……たまらない

あ

いのちのせい♡

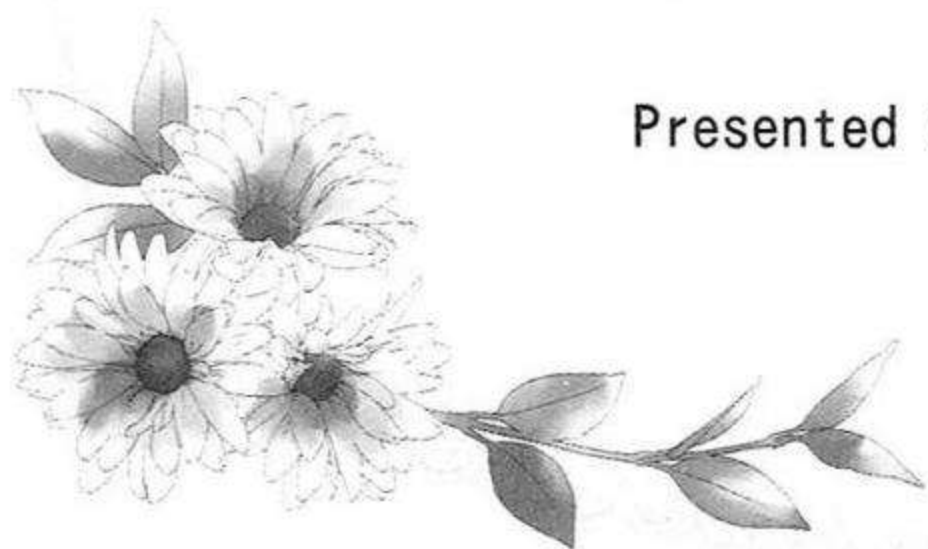


おわります



誰とは言わない孤悲の話

Presented by genshi



これは決して、恋ではない。

しんと静まり返った倉庫の奥、薄暗闇の中で一組の男女が体を触れ合わせている。

少女はまだこういった触れ合いに慣れていないのだろう。

男がじつと少女の瞳を見つめそのまま顔を近づけようとすると、どう振舞えばいいのか分からないらしくその瞳を見つめ返して体を硬くしてしまった。

「……一ノ瀬さん……」

ようやく搾り出した声は少しばかり震えて男の、一ノ瀬トキヤの心を揺さぶる。

普段から明るく可愛らしい声だと思うのに、今の彼女の声色はそれに加えて何か、トキヤ自身を妙な気持ちにさせて仕方がない。

「……七海、君」

「あ、んっ……!」

抑えきれない衝動のままにトキヤが少女にくちづけた。

初めてのときは唇同士を触れ合わせることにしか知らなかったが、今では深く舌を絡ませる快感を知っている。

恋愛禁止の規則が頭をよぎってもこの快感にはかなわず、すぐにかすんで消えていってしまった。

これから芸能界にデビューすることを考えたら、決してシャイニング早乙女の命じる恋愛禁止令に逆らってはいけない。

そう分かっていても、トキヤには彼女に触れたいという欲を抑えられない。

彼女——パートナー、七海春歌と恋に落ちてはいけないのにと必死に自分に言い聞かせながら、間近にある彼女の顔を見つめていた。

ことのはじまりは休日のレコーディングルーム。

互いの想いを感じながら恋愛禁止令のために全て知らない振りをして、二人きりのレッスンをもう何度も重ねてきた。

春歌もトキヤもお互いの事はもちろん好きだが、それと同じくらいに音楽を愛している。

今もより良い曲を作ろうと休日までレッスンにあてるほどで、必死でいるうちは互いのことを意識しないで済んでいた。

なのに、ほんの一瞬、楽譜に触れようとしたトキヤの指先が春歌の掌を掠めたことで、作曲家と歌手との関係は砂のように崩れてしまう。

「あっ……」

触れあった掌を慌てて引つ込めた春歌が頬を染めて困ったように視線をトキヤから外す。

そうしてちらりとまたトキヤに視線を戻して、目が合ったことに恥ずかしげな表情を浮かべてすみませんと小さく呟く。

その声音の中、彼女の戸惑いの裏に隠している喜びを見つけ、気付けばトキヤは彼女を抱き寄せてキスをしていた。

「ん……いちのせ、さん……」

じんわりと暖かい。

ただ触れるだけのキスだったのに、ぼんやりと春歌がトキヤを見つめてくる。

こうなってしまったら、自分も彼女もすぐにはレッスンに戻れないだろう。

「……行きましょう」

トキヤの言葉に春歌は逆らわず、促されるままにいる。

散らした楽譜をかき集めて、二人はレコーディングルームを後にしたのだった。

「あ、あっ……一ノ瀬さんっ……!」

自分の名前を必死に呼ぶ彼女の声が愛しくてたまらない。

春歌の口内に舌を挿じ込んで、戸惑い逃げようとする彼女の舌に絡めて粘膜同士をこすり付けあう。

「んうっ……♡」

「……っ……っは、君は……」

ひとしきり行われた舌への愛撫にとろんと蕩けた表情で春歌が息を漏らす。

声音だけでなく吐息そのものも熱く、ぼつてりと濡れて膨れた唇にトキヤが顔を近づける。

春歌の熱がふわりと肌に触れて、まるで頭の奥が痺れるような感覚にどうしようもなく体が熱くなった。

「……熱は、伝染するものですね」

「え……？ あ、んんっ♡」

春歌から移った熱を彼女に返すかのように、トキヤが再び春歌の唇に貪りつく。

彼女の小さな口はトキヤが大きく覆いかぶされば隠れてしまいうくらいで、舌を吸いだそうと口を窄めれば春歌が瞳を潤ませてその感覚に耐えた。

「ん……っふ、あぁっ……♡」

春歌の漏らした喘ぎはトキヤの理性を溶かし、熱の籠った彼の視線と吐息は春歌の理性を溶かしていく。

濡れた瞳で見つめあいながら、どちらともなく舌を差し出して更に奥深くまで触れ合おうと必死になっていた。

「は、んっ……」

「いちのせ、さん？ あ、っ！」

トキヤに抱きしめられキスをするのに精一杯だった春歌が、不意に自分の腿にあたる何かに気がついた。

一体なんだろうと見下ろせば、柔らかな少女の腿にトキヤが自らの腰を押し付けている。

いくら男に慣れていない春歌といえども、何度かの経験をした今となつては腿に触れるその感触に、彼の体が服の下でどうなっているのか想像がつくようになっていた。

「……一ノ瀬さん、の……♡」

押し付けられるトキヤの勃起した男性器に恥ずかしさと妙な快感を覚えて、春歌がぼつりと呟く。

その仕草にトキヤはますます熱を籠らせ、薄いブラウス越しに春歌の胸へ手を宛がった。

「きやあつ！ や、あつ♡」

「どうかしましたか。胸を弄られるのは好きでしょう？」

「そんな、あ、あぁっ……♡」

春歌はトキヤの両手から逃れようと身を振じらせるが、男が体全体で押し掛かって逃げる事ができなくなってしまう。

眉根を寄せてトキヤの与えてくるじんわりした快楽を受け止めていくうちに、すっかり春歌の体からは力が抜けて彼の思うままになっていた。

唇をきゅつと結んで声を出さないようにする春歌の口元を舌先でなぞりながら、トキヤはゆっくり彼女のブラウスのボタンを外していく。

ひとつ、ふたつ、上から鍵が外されていき、肌に冷ややかな倉庫の空気が触れる。

火照り始めた体にその冷氣は気持ちよく、春歌はふと息を漏らした。

「ん……」

トキヤが促すままに春歌はブラウスから腕を抜き、ブラジャ―が外されていく。

目の前の春歌の肌のまぶしさと布が床に落ちるほんの少しの音がトキヤにはひどく艶かしく感じた。

彼女の柔らかな胸の先では、立ち上がったピンク色の乳首が息をするたびにほんの僅か、ふるふると揺れて男を誘う。

トキヤがそこに指を伸ばし、ぶつくりした粒を二本の指で挟んでくりくりと転がして愛撫を加えると、今までよりも強い刺激に春歌が思わず嬌声を漏らしてしまった。

「ひやあつ！ つや、だめえっ……♡」

彼女の喘ぎを聞きながらぐにと乳首を摘まんでいると、最初に触れた時よりもそこは堅くぴんと立ち上がってきたように思える。

「堅くなってきましたよ。周りはいこんなに柔らかなのに」

「やあつ……♡ つあ、引つ張るの……あああつ♡」

春歌の大きめの乳房は非常に柔らかく、布越しではなく直接触れるとその体温の穏やかさもあつてずっと触れていたいと思うほどだ。

堅く勃起した乳首との対照的な感覚が心地よく、トキヤは何度も交互に乳房と乳首を弄くりまわした。

「……女性とは、こんなにも柔らかいものだったんですね」

トキヤが興奮に息を荒くしながらも、妙に感心した様子でぼつりと呟く。

春歌が快感に細められた瞳で彼を見れば、トキヤはうつとりした表情で少女の肌に触れていた。

「ひどく……気持ちがよくて……」

「あ、ああ♡」

乳房をゆるく揉んでいたかと思うと、乳首を指先で軽くぱちんと弾く。

突然の刺激に春歌が顔を歪めて快楽を訴えた。

「や、そんなにっ……♡」

瞳を潤ませてトキヤに縫いつく、それに応えるようにトキヤも彼女の名前を呼んだ。

「七海君」

言葉にしてはならない感情を全て普段の呼び名に含ませて、再び触れ合うだけのキスを繰り返す。

熱い唇が春歌に何度も何度もくっついては離れ、トキヤは彼女の心をじわりじわりと奪っていったらいいのにと願っていた。

「一ノ瀬さん……わたし……ん、っ」

春歌が何かを期待したような瞳でトキヤを見つめて口を開いた、その先の言葉をトキヤはキスで強引に奪い去った。

彼女が何を言おうとしたのかトキヤには想像がついたが、それを口にされては自分たちはどうなってしまうだろう。

これは決して、恋ではない。

「んっ……は、あ……」

「……何も言わないでください」

苦しそうに告げるトキヤに、春歌はその通りに何も言わず、ただ彼を見つめている。

いつしか春歌の手は彼の腕をしっかりと掴んで離さないでいた。

「これは恋ではありません。私達の間にある感情が、ただの恋であるはずがないんです。……だからどうか、何も」

トキヤが自分に触れていた春歌の指を攫い、離れないようにしっかりと絡めるように繋ぎ合わせる。

ピアノを弾く春歌の指先は丸く、今までの学園生活、パートナーとして二人で音楽を作り続けてきた日々を思い出させた。

「……どうか、せめて卒業まで……」

彼女はきつと分かってくれと信じている。

なのに自分が告げたことへの反応を見るのが恐ろしくて、トキヤは再び春歌の体を貪り始めた。

「ひや、んっ♡」

片方の手を繋ぎあわせたまま、もう片方の手をスカートの中に差し入れ、腿に掌を這わせる。

しっとりした肌の感触が心地よくて上下に撫でていると、春歌が身を震わせて足を閉じようと動いた。

だがトキヤはそれを許さず、閉じられてしまう前に彼女の足の付け根へ指先を滑り込ませた。

「あああっ……!!」

下着越しに春歌の入り口に触れる。

布地の向こうに薄く柔らかな茂みと肉の入り口があるの指先に感じながら、トキヤは何度もその谷間を擦った。

「やああっ♡ そこ、あ、んんっ……♡」

「随分と声を出して……そんなに気持ちがいいのですか？」

「ん、っ……♡」
問われた内容はあまりにも恥ずかしくて、春歌に答えられるものではない。

だけど否定をすることもなく、トキヤの指先が布越しに陰唇をゆっくりなぞるの受けて、春歌は顔を快楽に歪めていた。

熱を散らそうと時折頭を振って、その度にふわりと香る春歌の汗の香りが女である事を強調してトキヤを煽り立てる。

「七海君……」

「つく、ん……あ、っ……♡」

トキヤの指が、先ほどよりも一層強く春歌の下着に食い込んで、布地ごと中に入ろうと入り口を責め立てはじめる。

軽く突付くようだった仕草は次第にぐりぐりと強く布を押し付けるものにならわってゆく。

不意にトキヤの指先が、ぽつりと膨らんだしこりに触れた。

「あ、ああああっ……！ ひや、そこはっ……♡」

春歌が声を上げ、両手でトキヤの指先を止めようと絡めた指先を解こうとする。

だが繋がれた手はそのままトキヤに強く握り込まれてしまい解く事が出来ない。

仕方なく片手だけで彼を制そうとしたが蕩けた春歌の力ではどうすることもできず、トキヤは再びそこを布の上から弄り、

彼女の嬌声を楽しんでいる。

「やあああ♡ だめ、だめです……！」

「ふっくら膨れて……ここは、私と同じですよ」

指先でくると周りと周りから円を描くように陰核を弄った後で、トキヤが春歌の手をそのまま自分の股間に導いた。

「……っ！」

ズボンの前をくつろげて下着越しに勃起した男性器を触らせてやると、春歌はびっくりと一瞬手を引こうとする。

しかしそれを許さないトキヤは、自分の性器に彼女の掌を這わせるように、彼女の手の上から自分の掌を押し付けてやった。

「女性の陰核と男性の陰茎は、生まれる前のまだ男女の区別のない頃は一緒の器官だったそうですよ。つまり」

トキヤが春歌の首筋に口を這わせて、耳元まで舐め上げる。

その合間も彼女の掌を自分の性器から離させてはやらず、ゆつくりと撫でさせるように動かしてやった。

春歌の掌の僅かな動きを感じてひどく興奮し、自分の性器が更に膨れていくのが分かる。

「君の陰核がこんなに膨れているということは、君が私と同様に興奮してしまつて仕方がないとはつきりと示しているんです……ですから、構いませんよね」

「え……あ、あっ！」

トキヤがスカートを捲り上げてぐい、と春歌の下着を一気に脱がしにかかる。

春歌は足首に引つかかった自分の下着に一瞬視線をやつて、心細さにふると身を震わせた。

潤んだ瞳で不安と期待、快感、色んな感情をない交ぜにしてトキヤをそつと見つめる。

彼女に一度だけ優しい視線を返して、トキヤは両手で春歌の腰を掴んで逃げられないようにし、その入り口に性器を宛がおうとする。

「あ、っ……♡」

「……入れますよ」

そう穏やかに告げるのが精一杯。

くち、とトキヤの陰茎の先端が春歌の陰唇に触れた瞬間、優しくしてあげたいという気持ちは今すぐ奥まで突き刺したいという欲望にかき消されてしまう。

春歌に心の準備をさせることもなく、トキヤはその欲のままに腰を突き出して彼女の中を貫いた。

「あ、あああああっ……♡」

「つく……は、あ……」

ずぶずぶと陰茎を春歌の内に沈めていくと、彼女は時折息を呑みながらも嬌声を漏らしてトキヤを受け入れる。

そのことがトキヤの肉欲とは別の、なにか胸の奥を満たしてたまらない。

肉体的な快楽のせいだけではない気分の高揚に表情を歪めていると、春歌がうつすら瞳を開いてこちらを見つめていた。

「んっ……♡ い、一ノ瀬さん……」

「七海君……」

互いの名前だけを口にして、その感情に名前はつけない。触れるか触れないかのギリギリまで顔を近づけて吐息を味わい、軽いキスを落としながらトキヤが腰を動かした。

揺さぶられて春歌の胸がふるふると揺れる、その肉の動きと彼女の快楽にゆがむ表情が艶かしくトキヤの脳裏に焼きつくようだ。

「あああっ♡ ひや、んっ♡」

きゆうきゆうに陰茎を締め付ける春歌の中が気持ちよくて、本能ばかりで彼女を貫きその奥に何度も叩きつける。

自分から漏れる吐息と彼女から漏れる嬌声に、この行為は恋の産物などではない、ただの性欲処理なんだとトキヤは自分に言い聞かせた。

恋だということを、認めてはいけない。

「やあっ♡ も、あああっ……♡」

ひっきりなしに漏れる嬌声と口元から零れた唾液を掬い上げるようにトキヤが春歌の唇に指を伸ばすと、子供のように彼女が男の指先に吸い付く。

「ん……っ♡ つちゅ、んんっ……♡」

伏し目がちにして自分に縋る春歌に、背筋をぞくぞくするような快感が走る。

濡らされた指先を彼女の口から引き抜いて下の茂み、二人が繋がった箇所をゆるく撫でれば春歌は口元の唾液を気にする様子もなく喘ぎ声を上げた。

「あああっ……♡ つや、だめ、なぞるのっ……♡」

「なぞられるのが、気持ちいいからですか？」

「んっ……」

口を閉ざす春歌にトキヤはなおも結合部を撫でて責め立てる。

「君は、どこもかしこも気持ちいいようですね。ほらやっぱり、ここも」

「っ、ふあああっ……♡」

トキヤがぶつくりと膨れた陰核に直に触れると、彼女の肉がきゅんと中に埋め込まれた陰茎を締め付ける。

そのあまりの気持ちよさにトキヤは何度も何度もその行為を繰り返して、溢れ出る欲望を押さえつける事はもうない。

「あああああっ♡ 一ノ瀬さ、ん、やあああっ♡」

「っ……!」

きゅうきゅう締め付ける春歌の肉は自身の奥に男の精を受け取るべく蠢いている。

それに逆らわずトキヤも陰茎をゆっくり引き抜いては思い切り彼女に打ちつけて、汗を散らしながらその最奥での射精を目指す。

「ああっ♡ あ、やだっ、なにか……あああっ……♡」

その蠢きが次第に細くなり、トキヤを見つめる春歌の目も快楽にどこかうつろになってくる。

絶頂が近づいているのだろう、何かに縋りたいのか春歌の指先がトキヤの腕に触れて、びくびくと彼の前後に揺らす動きに反応しながらも離れる事はない。

「……っ……! そんなに、君は……んっ……」

「ふ、あああっ♡」

触れてきた彼女の掌を片方の手でしっかりと掴み、キスをすれば舌を絡めて春歌もトキヤに応える。

お互いに理性もなく蕩けた視線を絡ませあいながら、最後の最後、トキヤが彼女の中に精を放つために一度大きく奥まで貫いた。

同時に、彼女の陰核をきゅっと抓りその快楽の淵から絶頂へと導いてやる。

「やあああっ! もう、あ、あああああっ——……♡」

「く、っ——……!」

一際高い声で快楽を告げる彼女の体はトキヤの陰茎をぐいぐいと引き込んで震え、そのままトキヤも彼女の中に精を放った。目の奥とえばいいのか、妙なところがチカチカと真つ白になるような強烈な感覚に意識を取り落としそうになりながらも、体は本能で彼女の奥に射精を続けている。

数度ぐつと腰を押し付け春歌の中を自分の精で塗りつぶしてから陰茎を引き抜いてやれば、一瞬の間を置いて春歌のひくつく入り口からとろとろと白濁の精が溢れて陰部を汚す。

「あ……っ……♡」

下肢を伝う精の感覚にぼんやりとした様子の春歌を見つめながら、トキヤは胸の奥が甘く痛むのを感じた。

「七海君……」

本当は、性欲処理でも一時の快楽でもない、ただの恋でさえない、もつと強い感情が自分の奥に潜んでいる。

この想いがいつか、きちんと認められる日が来るのだろうか。

いつか訪れる未来のきらめきを思いながら、トキヤの掌が春歌の肌を優しく伝う。

これは、ただの恋のように簡単なものではないのだ。

Make love Songs



春歌！

ひさしぶりー！
元気だった？最近
全然会えないんだもん。

友ちゃんこそ
お元気でしたか？

ぎゅー

きゅー

そうそう

さつきお土産に
チョコ貰ったんだけど

チョコ

今ダイエット中
だから、あげるね。

美味しいチョコなんだ
けど、ちゅー
お通入って

最近逢えてない
なんて言ったら

ダーリンとでも
一緒にたべてー

きゅーきゅー
きゅーきゅー
きゅーきゅー

きつと心配を
かけてしまっ
ますね。

あんなに頑張っているのに
寂しい：なんて
我侭は言えません。



あーいー
もどもど

あ
ダ：
神宮寺さん

ダーリンに相応しくみえる
綺麗な女の人たちー

大人の女性に、
なんて

口ばかりで

変わりばえしない

わたし

一緒に居られなくて 寂しい
悲しい そんな我侭ばかり

あふれてしまいそう



っー!?!
レディ?
どうしたんだい!?





どうしたの？

何かあった？それとも
体調でも悪いのかい？

ああ、ゴメンね
レディたち

彼女を送っていくから、
申し訳
ないけどまたね。

やつ、あの！
違います！あの…



違うんです！あんな所で
泣くつもりなんて無くて
自分でもどうしてあんな
事になったのか分からなくて
ご迷惑をお掛けする
つもりは本当に…！！

ハニー

解ってるよ、だからほら
ちよつと落ち着いて？
ね？

あ、あの！

おきく

あの…



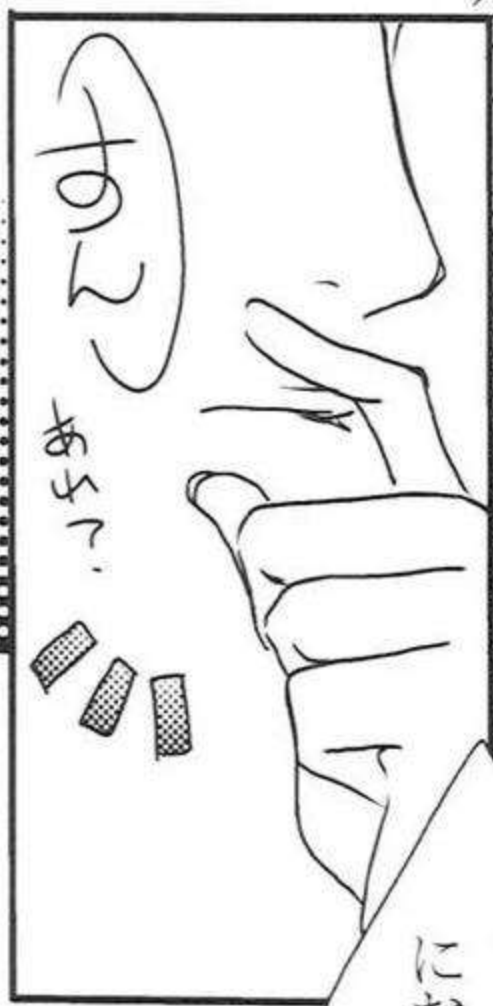
ちよつとだけ

寂しかったんです
最近海外ロケとかで

あんまり逢えなくて
それなのに綺麗な人に
囲まれてるし…

あぷる

なにこの可愛い生き物…！
普段我侭なんて言わないのに！



あぷる

あぷる

ハニー何か
甘い…

アルコールの
におい？



友ちゃんから
チヨコなら頂き
ましたけど…

チヨコ？

これです。
ちよつとだけお酒が
入ってるけど美味しい
からって…

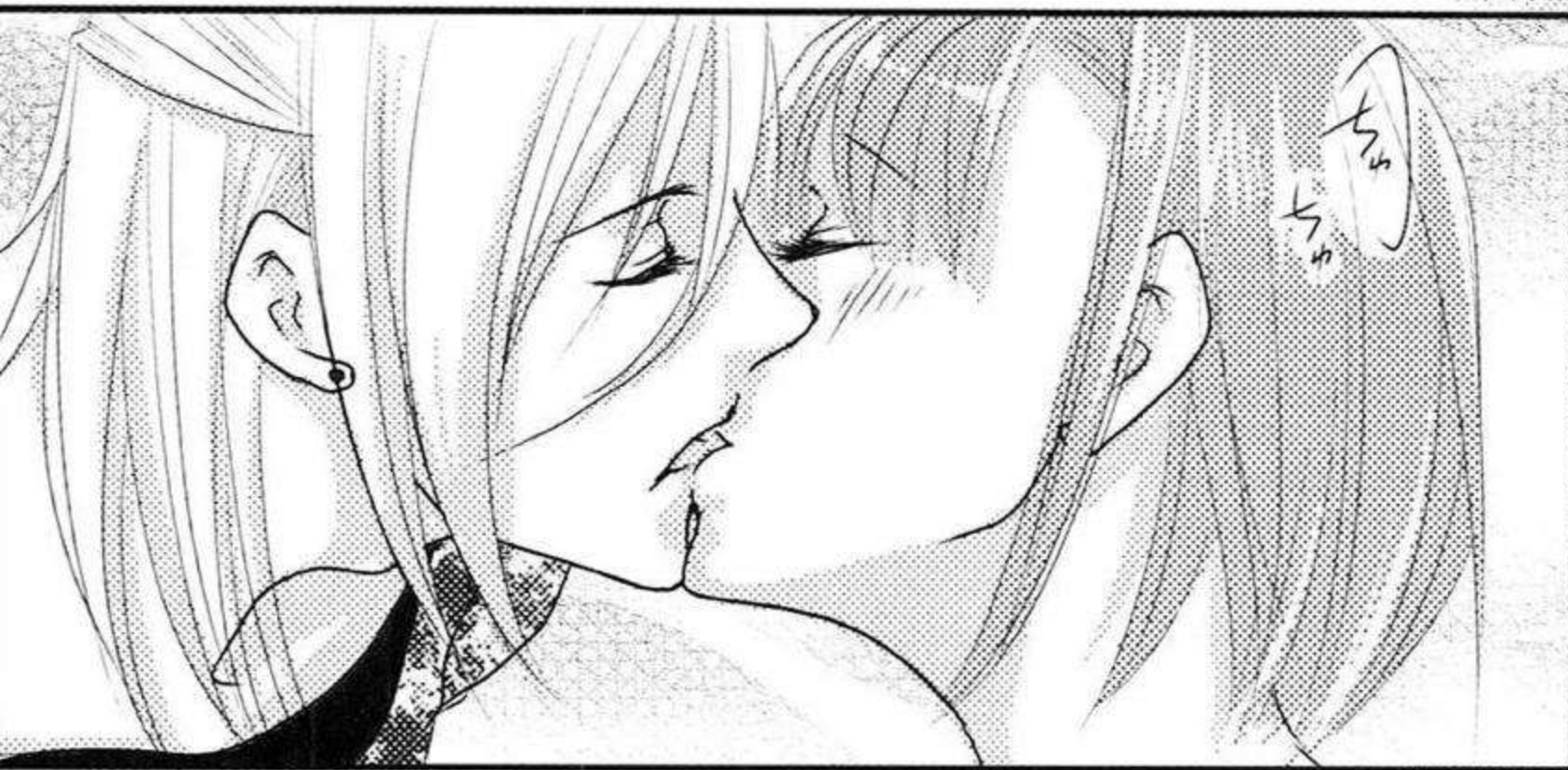
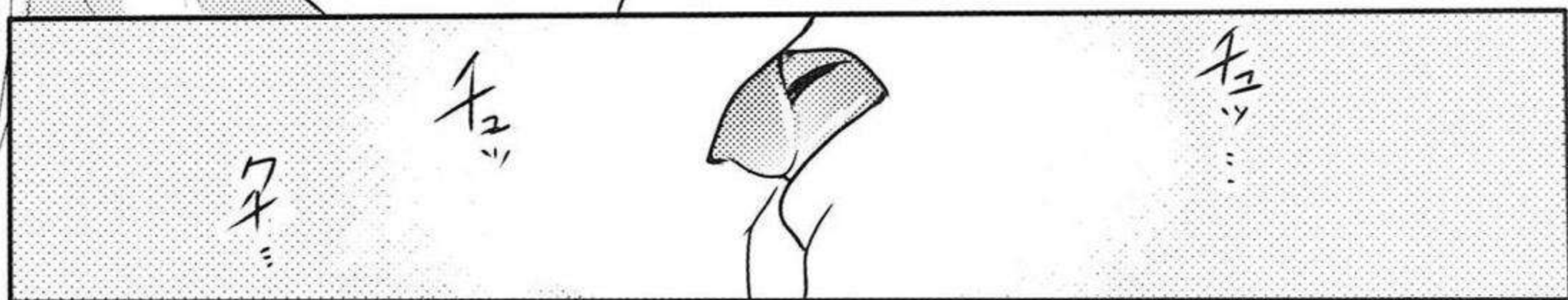
あー…

ボンボンか、
どうりで…

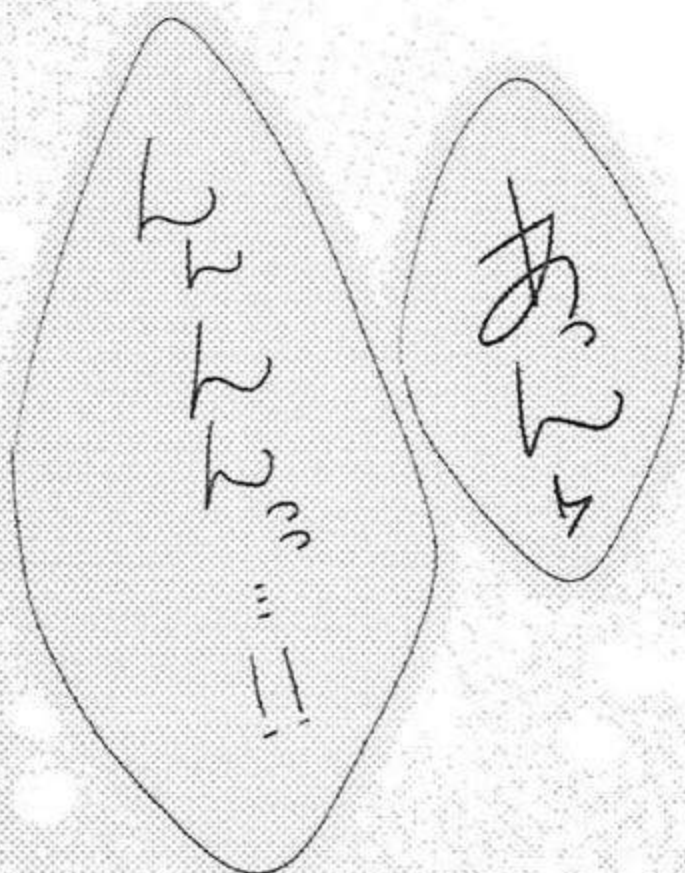
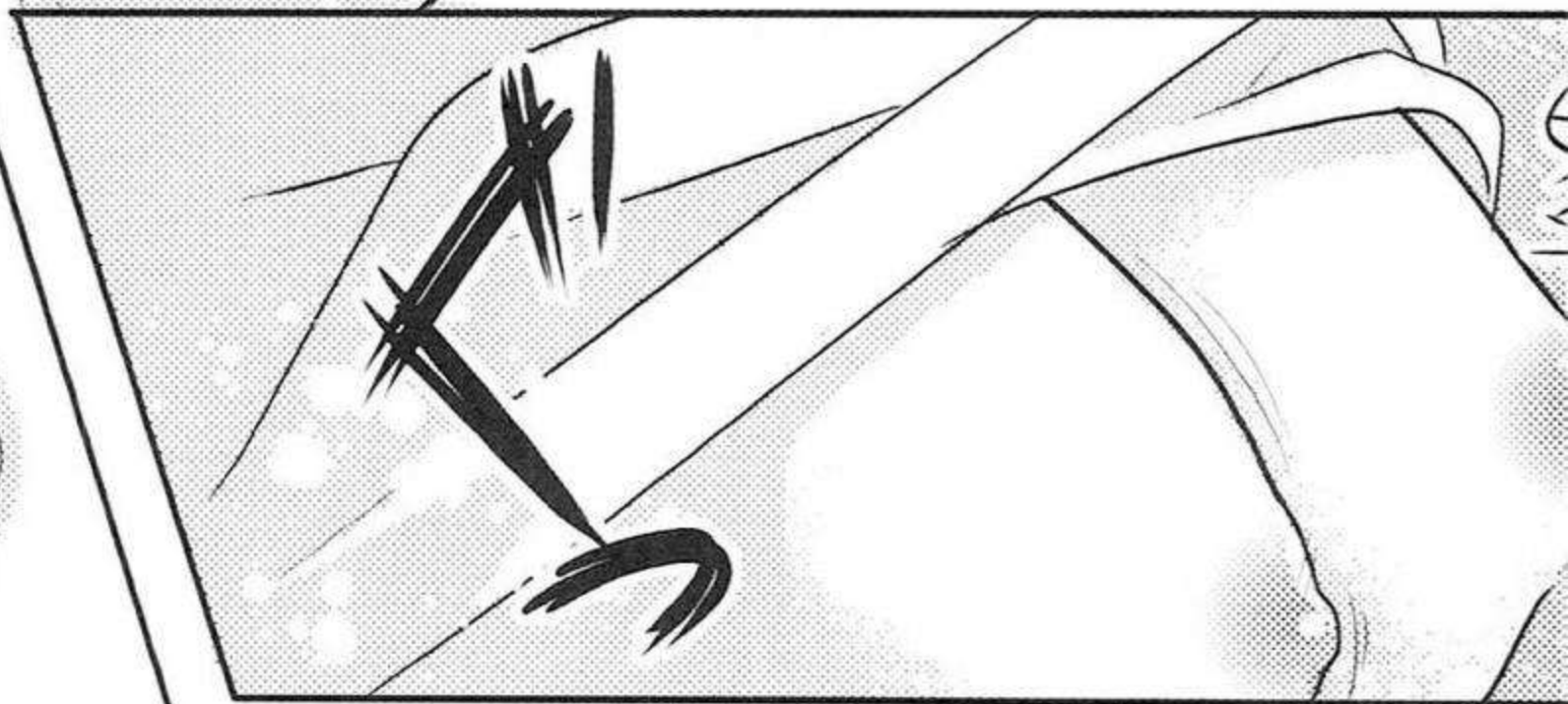
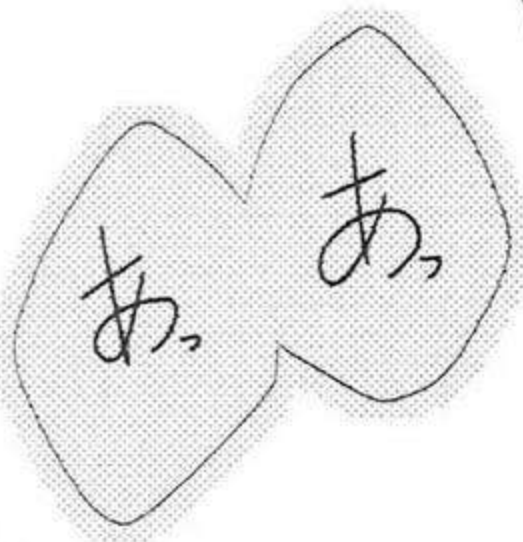




…
ねえハニー
後でいくらでも謝るから、
我儘言ってもいいかな？











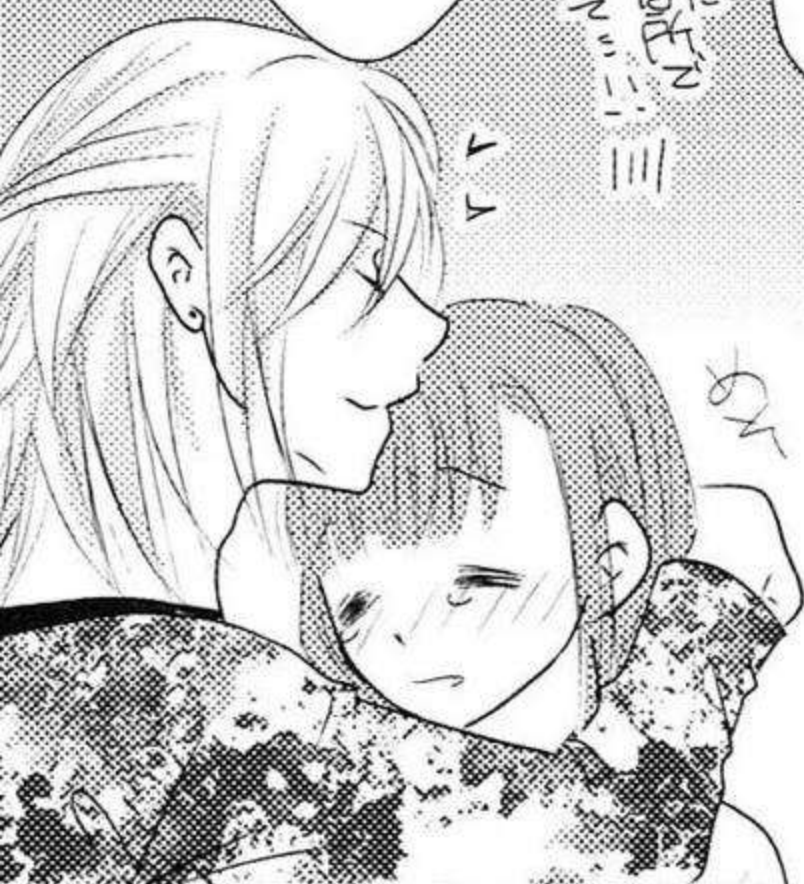
よし！
出来た！

もう二度と
お酒は飲みません…

そう？

そんなんに
＝んが所て
はんて…！！
川

素直なハニーも
凄く可愛かった
けど。



…ねえハニー

寂しいと思う
気持ちまで
我慢しないで

可愛らしい嫉妬なら
大歓迎なんだけど
中々言ってくれないから

俺が「寂しい」し「逢いたい」
って言ってるのに遠慮するんだから

ねえ、忘れないで？
俺が傍にいて欲しいのも
逢いたいと思うのも

他の誰でもない
ハニーなんだって

ダーリン、
好きです。

うん

愛してるんです。

うん

傍にいらせて
ください……

傍にいてよ
ずっと……

ぎゅ

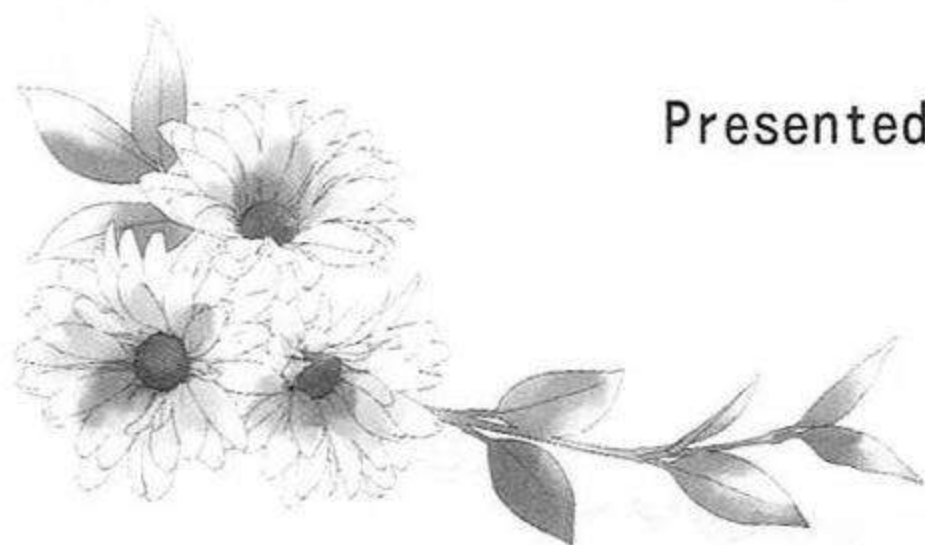
愛してるよ

春歌

Fin

専属Nailist

Presented by 水了



「わあ……すごい量、だね」

部屋に入っただけで目に飛び込んできたのは、机いっぱいに置かれたマニキュア。翔くん曰く、まだ全部確認しきれていないけど事務所の人が持ってきてくれたあの大きなダンボール二箱も、包みのサイズや重さからおそらくマニキュアじゃないか、とのこと。たまに赤、とか白、とか違う色も混ざっているけど見事に黒・黒・黒。翔くんのファンの人が送ってきてくれているんだから当然と言えば当然だけど、それにしてもテレビの影響力って本当に凄い……。

「一生塗り続けても使い切れないよな、これ」
流石の翔くんも、少しだけ困惑気味の表情。

きっかけは間違いなく、四ノ宮さんと出演したあの番組だ。

つい先日、日曜日の夜にやっているトーク番組に四ノ宮さんと翔くんが二人で出演した。以前デビューのチャンスとして用意された……翔くんが断った、四ノ宮さんとのデュエットソング。晴れてデビューを果たして同じ土俵に立っている今ならば断わる理由はない、と。『那月さえ良ければやらないか』と、翔くんから四ノ宮さんへ持ちかけた。なんだかとても翔くんらしくて、わたしは翔くんから四ノ宮さんとのデュエットソングを改めて作って欲しい、と依頼されたときにとっても嬉しくなった。

そして四ノ宮さんもまた、二つ返事と満面の笑顔で承諾してくれた。

曲が完成したら、当然ながら宣伝活動をしなればいけない。

このところ翔くんは四ノ宮さんと二人の仕事がとて多くて、そのトーク番組も、デュエットソングの宣伝の一環だった。『おしやれイング』という、主には司会されている三人の方とお喋りをする番組だ。翔くんと四ノ宮さんはずっと同室だったこともあるし、本当に仲がいい。番組のスタッフさんの中にそれを知っている人がいたらしく、「相手の秘密やプライベートをこっそり撮ってきて欲しい」と番組からビデオカメラを渡された。

そして四ノ宮さんが撮った翔くんのプライベート。それが翔くんの特徴的なマニキュアを塗るときの姿……膝を抱える格好だった。

どうやら翔くんは今まで無意識にその姿勢をしていたらしく、番組内でそのVTRが流れたとき、恥ずかしかったのかひどく慌ててしまった。マニキュアを塗るときの恰好も、その慌てる姿も。どうやら世間の一部の女の人の『ツボ』というものにハマったようだ。司会の一人だったモデルの女の人も翔くんに「かわいい」をずっと連呼していたような気がする。

つまり、きっと。その番組が放映された結果が、目の前のマニキュアの山に繋がるのではないかと思われた。

「とりあえず、全部一回は使う。それは決めてんだけど……」
例えば毎日塗り替えたとしても、一体どのくらいかかるんだろう？ いや、そもそも毎日塗り替えるなんて大変すぎるよね……
……なんて、余計な心配をしていると。

「春歌も一緒に使うか？」

「え？」

「やる、っていうのはくれた人たちに失礼だから出来ないけど、一緒に使うくらいはいいだろ」

「……で、でも」

つい、反射的に。猫の手みたいに自分の指先を丸めてしまった。わたしは自分の指先が、あまり好きじゃなかった。ピアノを弾くからといって爪は短くしてるし、とてもじゃないけど黒いマニキュアなんて似合いっこない。翔くんだってヴァイオリンを弾くから爪を伸ばしているわけじゃないけど、それでも翔くんに黒いマニキュアはとても似合っていた。それにお揃いのマニキュアなんて、堂々と恋人同士だと明かしてしまうみたいで……やっぱり、良くない。

「あ……でもやっぱり黒、目立つか」

寂しいけれど。関係を公に出来ないわたしたちに、目立つ『お揃い』は許されない。翔くんもそれに気が付いたのか、残念そうな顔をした。

「……いや、待て」

でも、次の瞬間。まるで悪戯を思いついた子どものような笑顔、翔くんは浮かべていた。

「……や、やっぱり恥ずかしい」

「あーこら春歌、動くなつて」

どうして、断りきれなかったんだろう。

笑顔の翔くんから出た言葉、それは。

『手が無理なら足があるよな！』

確かに、ペディキュアなら夏の時期以外は人に見られることは滅多にない。それに隠れたお揃い、っていう感じがして少しくすぐったくて。それならいいかもしれない、と思ってしまう。だけど、まさか。

翔くんが塗りがるなんて、思わなかった。

「うう……」

ほんの少し抵抗してみたものの、結局翔くんにおしきられてしまい。渋々シャワーを浴びて、最近置かせてもらうようになったばかりのルームウェアに着替える。そして翔くんがいつもするみたいにソファに膝を抱える格好で座ると、翔くんはソフ

アではなく床に座ってわたしの足の高さに目線を合わせた。もう、今これだけで死ぬほど恥ずかしい。

そもそも足の爪先に翔くんが顔を近づけることが十分すぎるほどにわたしの羞恥心を煽るのだ。これでもしシャワーを浴びさせてもらえてなかったらきつとわたしは走って逃げた、かもしれない。一日仕事をしたそのままの足を恋人の目の前に……考えただけで気絶しそうだ。そこは女の子として、死守した。

「んじやまずはベースからな」

でも翔くんはきつとそんなことまったく気にしてなくて。フアンの人からもらったマニキュアじゃなくて、普段翔くんが使っている黒のマニキュアと、きちんとベースコートとトップコートを用意して待っていてくれた。

「……んっ」

シャワーを浴びたばかりなのと、緊張して変に身体が火照っているのと。足の爪先に翔くんがベースの透明なマニキュアを塗った瞬間のひやりとした感触に、思わず声が出た。一瞬、ぴくりと翔くんの手が止まった気がしたけれど。気のせいだったのか、そのままゆつくりと丁寧に一本一本透明のマニキュアが塗られていく。

翔くん、器用だなあ……

流石に慣れているだけあって、あっという間に十本の指のベースを塗り終えて、黒のマニキュアに持ち変える。「黒、はみだ

すと目立つから動くなよ」そうもう一度念押しをして。さつきよりも丁寧な、今度はゆっくりと。わたしの爪先が、黒く染まっ
ていく。その様子を、気が付くと息を止めて見つめているわ
たしがいた。

今までもペディキュアを塗ったことがないわけじゃない。でも、やっぱりピンクとかベージュとか。色の濃くない、肌馴染みのいいものしか使ったことがなかったから。黒く染まった爪先は、それだけでひどくわたしをドキドキさせた。

「……ふう」

翔くんが、大きく息を吐いてトップコートのマニキュアに蓋をする。ようやく、終わった……？安堵の息をつこうとした、その時。

「春歌はさ」

トップコートを置いて、もう何も持っていない翔くんの手が。

もう一度、わたしの足先に触れる。

「色白いから、すげえ似合うな」

「え……あ、」

突然の言葉に。咄嗟に言葉が出なくて。でもとりあえず有難う、とだけ伝えようとした次の瞬間。

「……っ！」

足の甲に、柔らかな感触。

「し、翔く……っ？」

あまりにも自然に、唇が寄せられて。何度も、何度も。翔くんがわたしの脛やふくらはぎに口づけを落とし始める。

「……っ」

どう動いても、翔くんを蹴ってしまいそうな体勢のせいで、うまく抵抗が出来ない。

「悪い……俺、ちよつとたぶん……やばい」

ちゅっ、ちゅっ、と音を立てながら……翔くんの手が、ゆつくりとショート丈のパンツから剥き出しの足を撫で始めた。数える程、ではあるけれど。今までも翔くんと、肌を……重ねたことは、あった。でも、こんな風に急に、なんてことはなくて。ペディキュアを塗られていたときからドキドキしていた胸の鼓動が、限界じゃないかってぐらいに早鐘を打ち始める。

少し、怖い。

浮かんできた感情は、情けないことにほんの少しの恐怖だった。このまま流されたら、どうなってしまうんだろう、訳が分からないことになりそうで、逃げだしたい気持ちでいっぱいになる。

でも。

「同じ、って。いいよな」

ふいに口づけを止めて、顔を上げた翔くんと目が合う。その視線にほら、と誘われるように視線を落とせば……足の甲に置かれた翔くんの指先と、自分の爪先が改めて目に入る。

完全に、お揃い。

「……うん、嬉しい」

頬が緩むのを感じると同時に、素直に言葉が出た。

「おまえその顔、反則」

「ひやっ」

本当に、一瞬の出来事だった。気が付くと背中に少し固めのソファの感触があつて。翔くんの顔越しに、天井が見える。

「勘弁してくれよ……可愛すぎだろ」

なんだか、とてつもなく恥ずかしいことを言われた気がしたのに。熱い、熱い翔くんの唇に塞がれて、何も言葉を発することが出来なくなっていた。

「んっ……ふ、う」

いつもの触れるようなキスとは違う、少し強引に重なった唇からにゆるりと舌が、挿しこまれる。こうなると、もうダメになることを知っている。ぴちゃぴちゃとした水音が頭に響くと同時に、翔くんに応えることに必死になってしまつて……霞みがかつたように意識がぼうつとする。何も考えられなくなつて、ただ翔くんに甘えて縋ることしか出来なくなつてしまうのだ。

それは幸福な時間以外の何物でも、ないのだけど、

「春歌……」

やがてゆつくりと離れた唇が耳元へ寄せられて囁かれたわたしの名前は、いつもよりも少し低くて掠れていた。翔くんもわたしと同じできつと余裕なんてないのかもしれない。むしろそうだといいな、と思う。だから。

「……大好き、です」

小さな小さな声で、ただどここの距離なら間違いなく届くわたしの気持ち、精一杯。あなたに伝える。

そんなわたしに翔くんは返事の代わりに、もう一度。

深い口づけを、くれた。

「俺この服、好き。手触りいいよな」

翔くんの部屋に置いてある部屋着はパイル地のもので、わたしも肌触りが気に入って買ったものだった。でも今、翔くんは。

「……あつ」

その部屋着の裾から手を差し入れて、直にわたしの肌に触れているのだから、パイル地の感触は手の甲でのみ感じているはずで……滑るように動くその手は、まるでわたしの肌の感触を楽しんでいるようだった。

もつともつと、何度も肌を重ねたら。いつかはこの恥ずかしさにも、慣れていくのだろうか。

「っ……」

わき腹から徐々に上がってきた翔くんの手のひらに、すつぽりと胸の膨らみがおさまる。お世辞にも大きいとは言えない胸だけど、妙に翔くんの手の大きさに馴染むことを知ってから、少しだけお気に入りになった。優しく、大切なものに触れるように。だけど確実に性的ないやらしさをもった熱い手のひらにやわやわと揉まれる。もうそれだけで、身体の中心に感じる違和感に思わずもぞもぞと足を擦りあわせてなくなってしまう。そんなわたしの反応を知ってか知らずか……片手が、太ももをさりと撫で上げたあと、下着の中心をそつと押した。刹那、薄い布の内側からくちゅつと水音が耳に届いた気がして。

「やつ……ん、う」

恥ずかしさから反射的に出た拒絶の言葉は、またしても翔くんの唇に呑み込まれた。

「う……」

何度か下着の上を往復した指先が、邪魔な布をずらしてしまつて直接敏感な蕾に触れられる頃には、もう。

身体も、意識もとろとろに溶けきつてしまっていた。

「翔く……これは……恥ずかし……あんっ」

身に着けていたものをすべて取り払われているだけでも限界なのに。間に翔くんがいるせいで大きく開かされた足をさらに片方持ち上げられて、またしてもちゅっちゅつと音をたてながら普段はされることのない足へのキスが繰り返され落とされる。しかもお互いの恥ずかしいところが、完全に触れ合ってしまったていて……ぬるぬると刺激され続けた下半身はもう、甘い痺れによってすっかり力が入らなくなってしまうていた。

「も……やあ……」

羞恥心とふわふわした感覚で、どうしていいかわからなくていやいやするように首を横に振ると。

「……っ！」

圧倒的な質量をもった翔くん自身が、ようやく。

わたしのナカへ、挿入ってきた。

かすかな明かりを感じて、うつすらと目を開くと。いつの間にかベッドへ運んでくれていたらしく、きちんと部屋着を身に着けた状態でわたしは眠っていた。

「翔くん？」

「ん、起きた？」

隣で身体を起こして何かを読んでいた翔くんが、まだ少しぼーっとしているわたしに優しく微笑みかけた。

「それ……ファンレター？」

「おう。なあ春歌、ジェルネイルってやったことあるか？」

ジェルネイル。聞いたことはあるし、なんとなくどんなものかも知っているけど、実際にやったことはなかった。

「ないけど、どうして？」

「なんか、よければぜひ来てください、ってさ」

そう言って翔くんはファンレターに同封されていたらしい、ネイルサロンのリーフレットを見せてくれた。

「はげたりしないって便利だなー」

興味深そうにリーフレットを覗き込む翔くんだけど、自分でも驚くほど咄嗟に。

「行ったら嫌、かも……しれない、です」

「へ？」

そんなワガママが口をついていた。だって、ネイルサロンということは。女の人が、何時間も翔くんの手を握っている状態になると、いう訳で。お仕事でもないのにそれは……馬鹿みただけで、少し嫌だと思ってしまうた。

「さ、最近自分でも出来るセットも売ってるって聞いたことがあるから、もし翔くんがやりたいならわたし、練習する」

少し慌てたわたしの反応に、翔くんはピンときたらしく。

「春歌が嫌なら、行かぬーよ。ちよつと興味あったんだけどな」。珍しくないか？男のネイリストって」

そう言いながら、ファンレターを見せてくれた。確かにそれは男の人からで……。まさか男の人だったらいい、なんて当然言えるはずもなく。

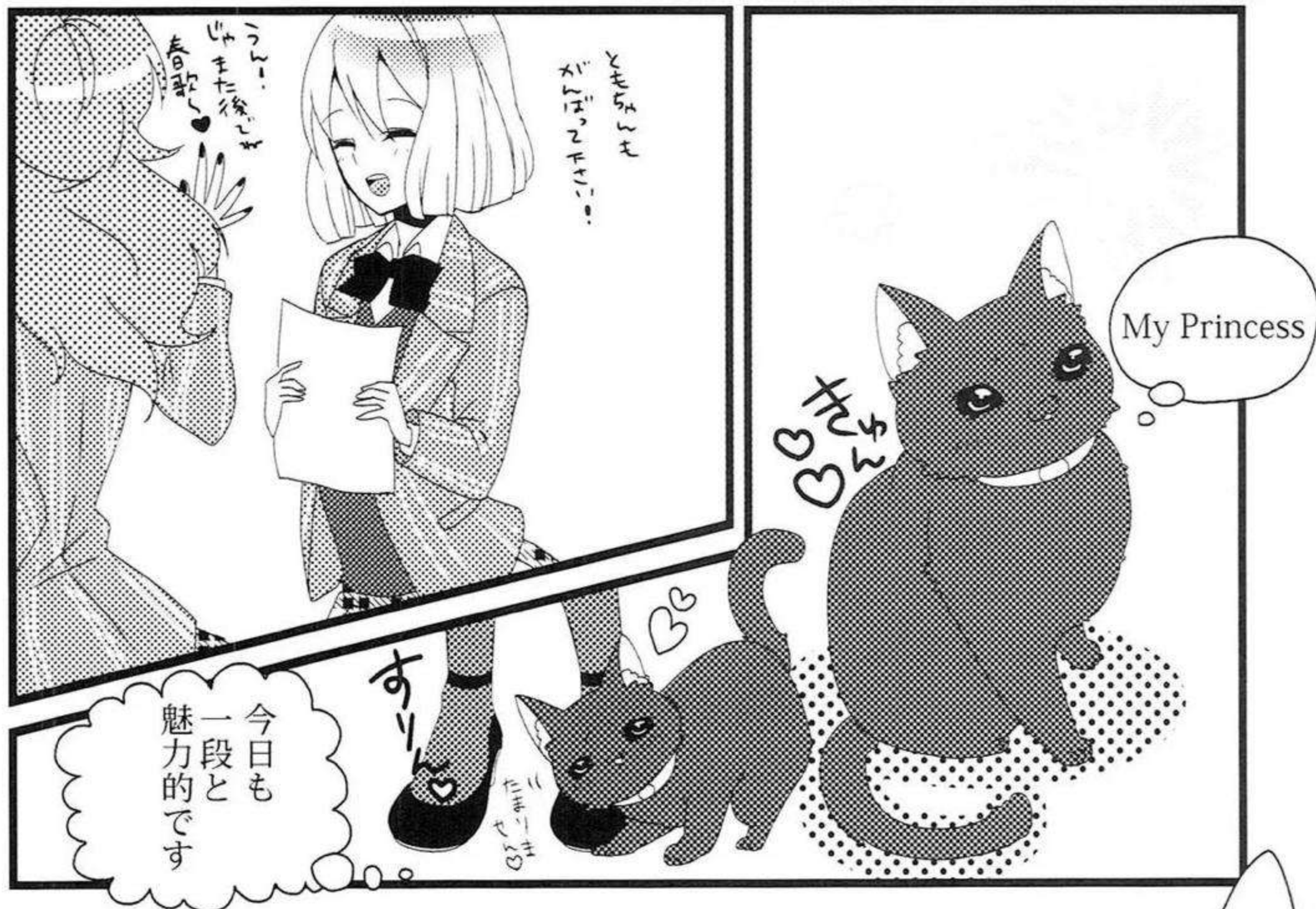
「ま、とりあえず」

でもヤキモチに気付いてる翔くんは、どこか嬉しそうで。

「次は春歌に塗ってもらうことにするかな」

ひらひらと黒く塗られた爪先を見せながら、悪戯っ子のような顔で、笑った。

ガマンできにゃい！ おふよ





ふめ

ええ?!
私の下着がっ?!!

ひやあ!

返してください
セシルさん!

ボーン!!

あらあらあら



私の下着
返して下さい





ごめんなさい春歌
でもっ 助けて・・・
くださいつつ

どーん

ひゃよよあ

えとっ・・・
あのつつ
私なんか
お役に立てるん
で
しょうか!??

確かに辛そうです

Non!

アタにし
か
私を救
えんこ
と
出来ま
せん!!

魅力オーラ

分りました

でも

うまく出来るか
分かりませんよ?

あっ

はむっ

はあん

ちゅぱ

んぐっ

気持ちいい
ですか？

Yes
ああ！
ミューズ！

くちゅ

じゅふ

すぽぽ

ちゅる

なんだか…

私まで
変な気分
になってきました…

もじっ

っん？

あの？

私も春歌に
気持ちよくなつて
もらいたいです

ひゃっ！

!!?!

ストッキングがっ

変ですね？



春歌

ん、

あ、

ん、

ん、

ん、

可愛いつ！

カリッ

ん、

可愛いです

ん、

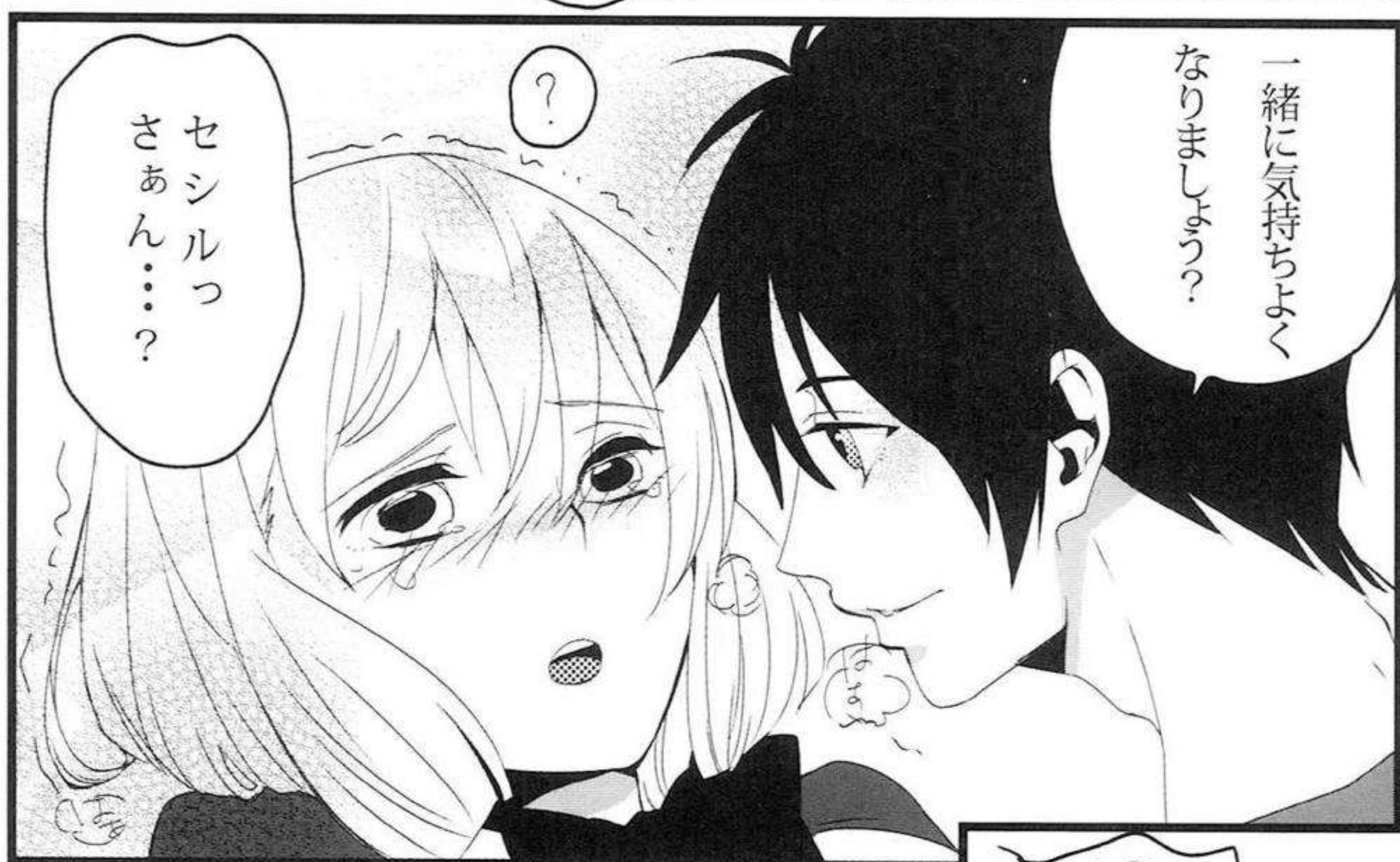
ん、

ん、

ん、

ん、

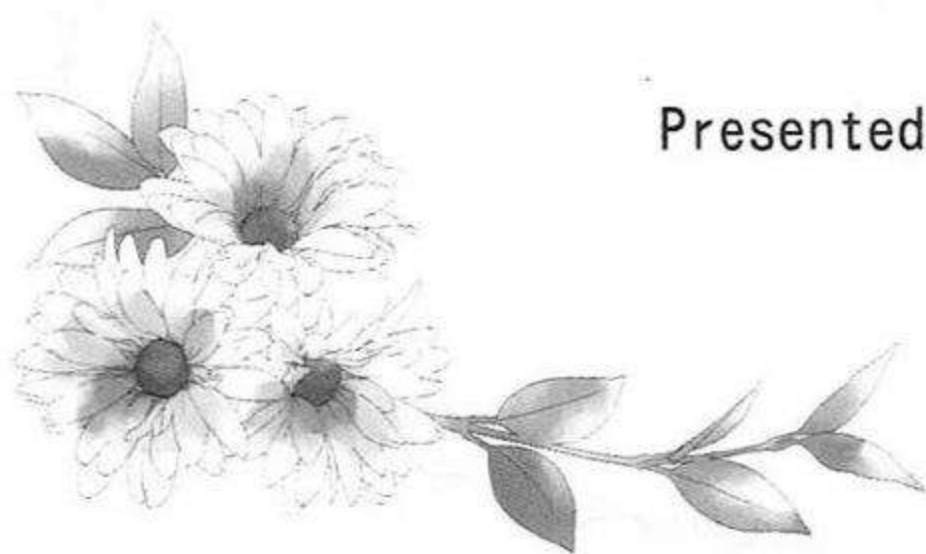
ん、





みだらな女神の聖なる儀式

Presented by れん



「……パワーが……無くなってきた……？」

辛そうに事実を告げた神官の言葉を、春歌は呆然とオウム返しするしかできない。

アグナパレスにきてから数年の月日が経っていた。作曲家と、この国でのミューズとしての仕事を必死にこなし続け、幾多の壁やスランプをセシルと共に越えてきた。しかしここ最近、確かに胸にぽっかり穴が空いたような隙間というか虚しさというか、そういうものができたことをうすうす感じてはいた。

「……あの……わ……わたしは……どうす……れば……？」

震える冷えた指先を心細そうに擦り合わせる。

まさか、アグナパレスを追い出されてしまうのだろうか。永久に一緒にいようと云ってくれたセシルと、別れなければならぬのだろうか……。

不安が闇色の渦を巻く。

「……春歌！ ワタシのミューズ！」

「……セシルさん……」

セシルがこちらへやってくるのを見て、神官は氣を利かし、その場を離れた。

「どうしましょう……。わたし……ミューズとしての力がなくなってきたいるみたいで……」

「春歌……」

「わたし……これじゃあこの国にいる意味がありません……よ

ね？ わたしがセシルさんのそばにいる意味も……」

「春歌……おちついてください……」

「でもっ！ ……わた——！」

春歌の唇をセシルがキスで塞いだ。唇から流れ込んでくるセシルの熱。鼻をくすぐる甘い香り。出会った頃よりもまた逞しくなった両腕が、春歌の軀を優しく包む。

「ん……」

ちゅつと軽く吸い上げて、セシルが顔を上げた。彼のキスは、たった一度で春歌の心を落ちつかせ、手脚に血流を生んだ。

「……大丈夫……ですか？」

「あ、は、はい。……すみません、取り乱してしまつて……」

「ノン。驚くのも無理はありません。……このようなことは、過去に何度もありました」

「えっ、そ、そうなんですか？ その方々はその後、力を取り戻されたのでしょうか？」

必死の勢いで春歌が尋ねると、セシルは困ったように笑つて言つた。

「なにもしなくても力が戻った人も、なにかをしても戻らなかった人もいます。……それは、神の御心と言えること」

「……戻らないということは、どういふことなのでしょう？ ほかでミュージズが誕生したということですか？」

「そういうこともあります。けれど、しばらくミュージズが不在

だとしても神の加護があるので、すぐに国が傾くということはありません。ですからあなたも……」

「あの、さっき……セシルさんがおつしやつた、なにかをしても戻らなかったというのは……？ なにかをすれば、力が戻るということですか？」

差しのばしたセシルの手のひらは、興奮して赤く染まる彼女のまろやかな頬を撫でた。

「そんなにがんばらないでいいです。……アナタは、たとえばミュージズのパワーがなくなっても、ワタシの愛しい人に変わりはないのだから」

「でも……そんなことになれば、わたしはこの国にいる意味がありません……。わたしはセシルさんの……みなさんの役にたきたいのに……」

泣き出しそうになつて俯く春歌を、セシルは再びぎゅつと抱きしめた。

「……そんな顔をしないで……。確かに、方法はないわけではない。……けれど……それはアナタにとつてとても辛いものです……。しかも、その方法を試したからといって必ずパワーが戻るわけではない……。それでもアナタは……」

「……やります、させてください。だって……わたしはセシルさんとずっと一緒にいたいから……！」

顔を上げた春歌の瞳に、力強い光りがきらめいた。セシルは

それを見つけると、一度だけ優しく微笑んでから表情を引き締めた。

「わかりました。……では、アナタの気持ちを皆に話してきます。そしてワタシたちはしばらく会えませんが」

「……えっ！ ど、どうしてですか!？」

「これもその儀式のため……。耐えてください、ワタシもがんばります」

二人はお互いを抱きしめて、深い口づけを交わした。

「それでは、次に会えるのは一ヶ月後……儀式のときです。……」

「それまでどうか……元気で……愛しい人……」

離れていくセシルにすがりつきたくなるのを必死で堪え、後ろ姿を見送った。

「……春歌さま……」

気づくと、いつも身の回りの世話をしてくれる女官たちが、悲しみの色を滲ませながら微笑んで後ろに控えていた。

「……儀式の日までのお世話はお任せ下さい」

「……あ、ありがとうございます。よろしくお願いします」

春歌が頭を下げると、一人の女官がそつと手を取った。

「春歌さま、それでは身を清めに参りましょう。今日より一日八回、聖なる泉の水で沐浴し、香油を身体に塗って頂きます。

そして、儀式が終わるまでこの神殿より出てはなりません。わたくしたちはお世話をさせていただきますが、今のようには話もでき

ません。身も心も、五感の全てをまつさらにして頂かなくてはならないのです。よろしいですね？ ……それでは、これをお持ち下さい」

女官が小さな金の箱を取り出し、それを春歌の手に渡した。

「中には首飾りが入っています。沐浴の時以外、肌身離さずお持ち下さいませ」

「……は、はい」

「それでは、一度お部屋に戻られて準備をなさって下さい。ベツドの上にある衣と、その首飾りだけをお召し下さいませ」

「わ、わかりました」

春歌がそう言うと、女官たちは頭を下げてさがっていった。

これは、思っていたよりも孤独な試練となりそうだった。しかも、その試練が終わったとしても、ミューズの力が戻るかどうかかわからないのだ。

「……けれど、やるしかありません……」

春歌は呟いて部屋へと戻っていった。用意された服は、真っ白なシルクの布地で、服と言うよりは身体に巻き付け、腰紐で結わえ付けるだけという古代ギリシャ人を思わせるような簡単なものだった。そこに、金の箱から取り出した首飾りを付ける。金と銀の細い鎖が幾重にも重ねられ、エメラルドやダイヤ、ルビーなどの宝石が散らばっている。が、一番目を引くのはその鎖の先にぶら下がっているペンダントトップだった。繊細な装

飾が施された金の球体状の籠の中に、ウズラの卵ほどの珊瑚色をした珠が入っていた。

「……なんでしょう……。これが儀式の要になるもの……？」
目の前で少し揺らしてみると、籠の中でそれはコロコロと回った。——と、扉がノックされる。

「あ、も、沐浴ですね？」

春歌が返事すると静かに女官が入ってきた。口がきけないので、手でそつと先を示す。

春歌もまだ行ったことのない神殿奥に、地下へ続く階段があった。そこを降りると地下だというのにまばゆい光に満ちた、ドーム嬢の広々としたホールにたどり着いた。真ん中には大きな樹木が一本、青々と葉を茂らせ、その根の近くから蕩々と透明な水が溢れていた。そして石で作られた浅い湯船に流れてゆく仕組みだ。

「……すごい」

ごくりと息を呑む春歌を、女官はそつと導いた。身振り手振り、そのまま水に入れと言っている。透明な水は、見るだけでとても冷たそうだ。ぴりつとした感覚が足元から背中に走り抜けた。春歌は意を決して、そうつと爪先をその石造りのプールに沈めた。

「……んっ！」

確かに冷たいが、思っていたほどではない。地下水だからか、

すぐに肌に馴染んできた。春歌はほつとして、そのまま静かに身体を沈める。清らかで柔らかい水。身体中の悪いものが全て溶け出していくような感覚をおぼえる。一〇分ほど身体を水に浸すと、今度は別の部屋に連れて行かれ、全身に花の香りがする香油を塗り込まれた。それで今日の禊ぎは終わりだった。

残りの時間は、ただいつもの寝所で過ごすのだ。神殿以外は外に出ることも禁じられているので、実に静かで孤独な一ヶ月間が幕を開けた。セシルも来ない、女官たちと話もできない毎日、さすがに何度も気が滅入りそうになったが、それでも日本へ送る曲のラフを作ったり、アレンジの作業をしていると、気づけば時間が過ぎていくくれるので、仕事を取り上げられなかっただけマシというものだ。

だが、どうしても困ったことが一つだけあった。

「……ひや……あつ……ふっ……！」

声が大きくならないように、シーツをキュツと噛みしめる。秘部が、乳房が、熱くて熱くてたまらないのだ。夜具のひんやりとした感触に肌が栗立ち、どんな感覚もすべてセクシヤルなものに変わってしまう。そしてその燦々するような性欲は、日に日に増す気がした。

『……マイ……プリンセス……春歌……』

今夜もまた耳の中ではセシルの声がこだまし、頭には優しく愛撫してくれる彼が浮かぶ。

「……あつ……セ……シルさ……」

『アナタは……素敵……どこも……綺麗で……愛おしい……』

「つ……、ダ……メツ……!」

幻想のセシルの指先が、若草の中を這う。ただの想像なのに、本当に触れたように感じている。きゅうつと内股をすばませ、自分で軽く胸に触れただけで、春歌はあつさりと達してしまった。それほどに興奮していたのだ。

上下する胸と、急速に引いていく欲望。……残ったのは罪悪感のような後味の悪い孤独。

「……早く……儀式の日になればいいのに……」

春歌は目尻を涙で濡らす。

——寂しい……寂しい……

「セシル……さん……」

名前を呼んだとき、首飾りがシヤラリと音を立てた。

☆ ☆ ☆

数日後。いよいよ儀式の日だった。

「……さあ、春歌さま。よく耐えられましたね。けれど、これ

さえすめば結果はどうあれ、すべて終わりですわ」

女官が久しぶりに口を利いてくれた。

「……あ、もうしゃべってもいいんですか？」

春歌が尋ねると、女官は困ったように笑った。

「ええ。……もう春歌さまの声と体温で熟したでしょうから」

「……熟す？」

キョトンとする春歌に、もうすぐわかりますよ、とだけ女官は伝え、儀式のための着替えを手伝った。とはいえ、儀式の服装も、いつものシルクの布地をまとい、腰に紐で結わえるだけのものと、あとは薄化粧、そして例の首飾りだけだった。そして、案内されたのは神殿の礼拝堂の下にある広いフロアだった。ここも石造りで、壁や天井には何十本ものろうそくが灯され、ゆらゆら炎が揺らいでいる。薄暗いその中央部に、石棺のようなものがあつた。

「……あれは？」

「あそこへ行ってください。あとは、セシルさまのおっしゃる通りに……」

「セシルさんがいらつしやるのですか？」

愛しい人の名前に、春歌はぱつと表情を明るくした。気味悪かったが、勇気を振り絞ってその石棺に近づいた。傍に行くと同時に、後ろの方で重い扉の開く音がした。

「……セシルさん……!」

セシルは、真っ直ぐとこちらを見ている。春歌を見ても、いつもの優しい微笑みは浮かべない。射貫くような眼差しをこちらに向けていた。

「……春歌……アナタは本当に力を取り戻したいと思います

か？」

セシルが口を開いた。

「……は、はい！」

「ミューズの力がなくても、ワタシのそばには置いておける。

……それでもですか？」

「——はいっ！」

春歌の力強い声が石の壁に幾度も跳ね返った。すると、セシルは静かに目をとじて、心を落ちつかせて言った。

「儀式を始める。——……蠢く闇より生まれし虫。神の名の下におまえを解き放つ。主の中に見知った闇があるのなら、食らいつくせ！」

カッと眸を見開いて、セシルが右手を春歌の胸元めがけて広げた。すると、珊瑚色の珠に突然ヒビが入り、あつという間に全体に広がると中から何かが孵化した。

「……え？」

その瞬間、籠の底が抜け、床にべしやりと落ちたのは……。

「……それは、この一ヶ月間でアナタの体温と匂いを覚えたモンスターです。今からその虫が、アナタの存在を無に変えます。

アナタはミューズでなく、ただの人になる」

「な……あ……あ……二」

春歌の耳にセシルの声は届かない。みるみる巨大化していく虫と呼ばれた物から目が離せないのだ。分泌物で表面はぬめぬ

めと鈍く光り、男の腕くらいの触手が十本ほど四方にぐわあつと伸びた。頭は……ない。胴体から、うねる触手だけが生えている。おぞましい光景だった。

「いっ……いやあああつっ二」

恐怖と嫌悪感が最高潮に達し、春歌は反射的に逃げようとした。が、その行動を読んでいた三本の触手がすばやく両脚と胴体に巻き付いた。

「きやあああつ！」

触手は軽々と春歌を持ち上げ、また別の二本が春歌の両腕を拘束すると、胴に巻き付いた一本が衣服を引き裂いた。白い布が辺りに撒き散らされると、ろうそくのか細い光を受けて彼女の素肌が薄暗い空間に浮かび上がる。

「いやっ二 助けてッ……セシルッ……！」

ぬるりとした感触が胸に触れた。また別の触手が、春歌の乳房に巻き付き、形を変えながら嬲りはじめた。

「ひっ！ ……なっ……ああっ……二 やああつ二」

巨大な舌のようなそれらが春歌の肌を這う。先端はヒクヒクと動き、まるで彼女の性感帯を全て知り抜いたようになぞつてゆく。

愛しい人の前で裸にされ、しかもこんなモンスターに嬲られているのに、春歌の軀は恐ろしいほど敏感に熱を孕みはじめた。羞恥と恐怖は淫楽へ容易く姿を変え、子宮が物欲しそうに蠢く。

「あつ、あああつっ！ いやっ……いやあああつ！！ 見ないでっ……みなつっ——！！」

その様子をじっと見守っているセシルに、春歌は懇願して叫んだ。しかし、セシルは決して目を逸らさなかった。苦痛に満ちた表情で、唇さえ色を無くすほど噛みしめて。

——セ、シル……さんっ……！！

『……アナタは本当に力を取り戻したいと思えますか？』

先ほど、セシルはそう聞いた。

『ミューズの力がなくても、ワタシのそばには置いておける。

……それでもですか？』

最後まで、彼は春歌を想ってくれた。が、その差しのばされた手を振り切ったのは自分だ。——自分なのだ。

春歌の身体から力が抜けた。どうされるのかこの先はわからないが、この儀式はやり終えねばならない。あんな表情をしてまで耐えてくれているセシルのためにも。

「……はあっ！！」

腹が据わると、今度は猛烈な快感の波に襲われた。触手の一本が股の間をまさぐりはじめている。ぬめる分泌液を滴らせながら、春歌の淡い若草をまさぐり、深いクレパスにぐいぐい押し入ってくる。

「あつ……あつ……あ！ いやっ……んんあつ！」

太腿の狭い隙間を突き抜け、触手はまんまと秘部にたどり着

いた。そして、愛液をその身に擦り込むように、大きくグラインドをし始めると、春歌の嬌声はずっと甲高いものになる。肉褰とともに一番敏感な蕾が、触手に擦られ太ってゆくのだ。そして、太れば太るほど触手の動きがダイレクトに伝わり、快楽が稲妻のように脳へ突き抜けた。

「……くあつ、ひゃああつ……も……ッちや……うっ！！」

触手に揺すぶられながら、春歌は限界を迎えようとしていた。その間も触手は、彼女の秘部を、胸を、あらゆる性感帯を同時に嬲り続けている。もう、自分の身体に伝う体液が、触手の分泌液なのか自分の愛液なのかわからない。……目の前が白く霞んできた。この一ヶ月、なぜか猛烈な性欲に刈られ、何度も自分を慰めた。思いつくのはセシルの顔、感覚、温もり、そればかりで。彼に抱かれるところを想像しながら、この寂しさに耐えてきた。それを、このモンスターは卵の中で聞いて来たのだろうか。そう言えば、先ほどから責められている場所の多くは、セシルがキスを落としてきたところだ。セシルの温もりを思い出そうと触れ続けたそこは、もう完全に性感帯となった。

彼が触れてくる場所は、どんなところでも官能的だった……。

「……セシルさ……ああああつ……」

春歌の唇から、その名が零れた。

「んんっ……あああつ！ セシル……ッ！！」

達しそうになったその時、透明なフルートの音色が辺りに木

魂した。すると触手は急に動くのを止め、しゅるしゅると空気が抜けていくように縮こまってゆき、元の小さな珊瑚色の卵に戻った。

「……これ……は……？」

石棺の上で大きく息をつきながら、春歌が呻くようにいうと、ふっとその音色が途切れた。

「よく……がんばりましたね、マイプリンセス……。なんにもできなくて……ごめんなさい、ごめんなさい……。これは、アナタの中にある不吉な澱みを体外に出すためのものでした。その澱んだものは女性の子宮に宿るのです。そして、人が触れると今度は触れた人間まで澱みが感染してしまう……。……だからワタシたちは、あれにその役をまかせるしかないのです」

一ヶ月ぶりの温もりと、甘い香りに包まれた。耳元で涙ぐんだ声が、ずっと春歌に謝っている。きつく抱きしめられて、少し苦しかったが、春歌はホッと安堵の息をついた。

「……平気ですよ、大丈夫……。です。初めは少し……。いえ、かなり怖かったですけど、セシルさんがきつと何かあったら助けてくれると思ったので……。耐えられました……」

少し微笑んでみせる。すると、セシルがもう一度抱きしめてから、優しく額に唇を押しつけた。

「……もう、儀式は終わりですか？」

春歌が尋ねると、セシルは首を横に振った。

「いえ、まだ残っています……。でも……。これはきつと喜んでくれるはず……」

「え、んっ……！」

セシルが唇を重ねてきた。柔らかなその感触に、春歌は一瞬驚いたがすぐにうつとりと瞳を閉じた。

「……セシルさま……」

いつの間にかそばに来ていた女官の声に、二人ともハッと我に返る。気づけば口づけは、ずっと熱の籠もったものに変わっていた。

「浴場のご用意ができております……。……そちらへ」

女官が薄い絹の布で春歌の裸体を隠した。セシルはそのまま抱き上げる。

「——あつ、セ、セシルさん！ 大丈夫です、歩けます！」

「……いいえ、アナタはまだ震えています、春歌……。……どうか、僕のワタシに運ばせて下さい」

——違うのに……。春歌は思う。

熱っぽく潤む、あなたのその眸に見つめられるからこそ、わたしは愛しさに震えるのに……。

そう言いたかったのだが、セシルが額にキスをして穏やかに笑顔を作るから何も言えなくなってしまった。セシルはそのまま、女官が言う浴場へ歩いて行った。

浴場は、今までの無機質な部屋とは格段に違い豪華な場所で

あった。まず、部屋全体が真っ白な大理石でできており、広い空間の真ん中に、アラバスターで作られた女神像が両手を広げている。湯殿の周りは金で縁取られ、葡萄の彫刻がしてある太い柱から、湯煙の上がるお湯がその中を満たす。かすかに鼻腔をくすぐるのは柑橘系の香りだ。奥にはなめらかな毛足の長い絨毯が敷かれた休憩所であった。

「……すごいです……」

春歌が目を丸くすると、セシルはクスツと笑った。

「ここは……神殿の儀式をするための浴場です。だからあまり広くはありません。あの湯も、アナタがずっと使ってきた泉のものを温めました。弱った身体に、水はいけないから」

「……広く……ない？」

春歌はもう一度ざつと辺りを見回したが、どう少なく見繕っても、一〇〇人単位が一度に入浴できそうな広さだ。

「……さあ、まずは身体を清めましょう。ワタシがしてあげます」

「え、いつ……きやあつ！」

セシルは春歌を抱えたまま、ざぶんと湯に浸かった。ゆらゆら湯に揺れる布を必死に押さえる春歌は、けっきょく彼ののされるままだ。手のひらで、触手の分泌液を落としながらセシルが口を開いた。

「もう少しで……ワタシは儀式を終える前にあの虫を殺すところ

でした……。アナタの努力を無にするとこらだった……」

ふと、春歌は先ほどのセシルを思い出す。苦痛に満ちた表情で、噛みちぎるほど唇を噛みしめて自分を見守っていたくれた。「いいえ。セシルさんは、ちゃんとたえてくれました。……わたしこそ、虫……が出てきたときに逃げてしまつて申し訳ないです。……自分の覚悟の浅さが恥ずかしいです……」

「そんな……ことありません。あんな魔物、誰だつて恐ろしい。

……けれど、アナタこそちゃんと耐えて試練を受け入れた。素晴らしいです、マイミューズ……」

「けど……今はその力ありません。まだ、わたしはただの間……なのですよね？ それとも、このお風呂に入ったら力が戻るのですか？ さっき、次の儀式はわたしが喜ぶっておしやつたので、それなら充分、このお風呂で嬉しいです。冷えていた身体も温まりましたし、ホツとします……」

にこつと春歌が笑うと、セシルも困ったように笑った。

「……いいえ、今からです。……マイプリンセス……実は……もうワタシもそろそろ……理性が……切れそう……です……」

ジャブツと水音がすると、辺りは急に静かになった。セシルは、もう何度目かのキスで、春歌の唇を塞ぐ。

「ごめん……なさ……。んっ……ちゅっ……。アナタには……香油……を……はあっ……。その香油は……媚薬……。男はこ

の香りをかぐだけで……理性が……とろけ……ます。アナタも

……しばらく……んんっ……おかしかった……でしょう？」

もう唇が離せなくなったのか、口づけの息継ぎをするたびにセシルは説明をする。なるほど、それで合点がいった。性的欲求が全くないわけではないが、こんなに何度も自分を慰めなければ行けなくなるような高まりは初めてだったし、処女であるにも関わらず、子宮が疼くほど虫の愛撫に感じてしまったのはそういうことだったのだ。

「……んふっ……ど……して……そ……んな……」

絡め取られる舌を必死に動かして春歌が尋ねると、セシルがちゅうつと唇を吸い上げて言った。

「……アナタの力を復活させるのは王家の役目。王家にも、多少ながらミューズの力が代々受け継がれています。それを、アナタに注ぎ込むのです。文字通り、精根尽き果てるまで……」

「……ッ！　そ、それって……まさか……？」

「ワタシの精子を……アナタの胎内に……」

セシルは、あつという間に春歌が握っていた布地を取っ払い、赤みを帯びた肌に舌を這わせた。

「あつ、んんっ！」

びくつと春歌が反応するのを見て、セシルはにこりと笑った。

「……よかった、嫌じゃないみたい」

「い、嫌じゃありません……。ありませんけど……。こ、こんなに明るくて恥ずかしい……です」

「恥ずかしい……。どうして？　ワタシはアナタの全てが見たいし、全てが欲しい。……ようやく……。アナタを抱ける……。ワタシの喜びがわかりますか？」

たわわな乳房をすくい上げ、ざらりとした舌の表面で乳首を舐める。

「……ああ……。春歌……。マイプリンセス……。アナタに永久の忠誠と……。永遠の快樂を……。んう……」

「んんっ」　あ、そ……。舐めないで……。あつ！」

グリグリと舌に力を込め、乳房の中に固くなった乳首を押し込んだり、歯で甘噛みしてしがんだり。その度に春歌は大きく震えて、力のなくなった手でセシルを押し返そうとするが、セシルにはそれが自分にすぎるように思えた。

「……もう……。イキそう……。ですか？　そういえば、さつきは虫にイカされそうになってましたね……。マイプリンセス……。まさか、少しでも達してしまいましたか？」

熱っぽくきらめく翡翠の眸に、僅かに怒りが滲んだ。春歌は必死に首を振る。

「……そ、なこと……。なっ……。ん！」

「本当に……。？　途中から……。とても気持ちよさそうに……。してましたよ……」

セシルの指が、秘部にゆっくりと沈んでゆく。

「ほら……。こんなに……。ぬるぬるしている……。せつかく綺麗

に濯いだのに、アナタのここは涎を垂らしています……」

「あつ……やつ……」

「……楽に……した方がいいです、春歌。……これも儀式の続きなのだと……アナタはただ、受け入れればいい」

セシルは再び立ち上がると、休憩所へ春歌を運び、ふかふかの絨毯の上へ降ろした。そして、自分の身体からも一切の布地を取り払い、ぼうつとする春歌に肌を重ねる。

「愛しています、マイミューズ……春歌。アナタとともに……永久に……」

春歌の両脚を膝で割り、セシルはもつと密着して深いキスをした。

ちゆくちゆくと恥ずかしい水音を立てながら、春歌の理性をとろけさせる。すると愛液と香油の香りが相まって、二人は目がくらむような官能と興奮に襲われた。

「初めてのアナタに……優しくしなければいけないのに……」
はあつと熱い息をついて、セシルが独り言のようにつぶやく。

「……ダメだ……。こんなに……アナタが……欲しい……」

両脚を押し広げると、蜜をたたえた赤い華が咲く。

「……入りたい……、アナタのここに……」

両手の親指でさらに花卉を開くと、ねちやりと重い音がした。

セシルは、はち切れそうな肉棒を浸すように押しつける。

「ゆっくり……なるべくそうなるように気をつけます……」

「あつ……あああつ！」

ミシミシと腹の奥底から、聞いたことのない音がする。そして、この異様な圧迫感と痛み。春歌は必死に唇を噛んで我慢しようとするが、それでも呼吸の隙について喘ぎ声は浅く唇から漏れ出した。その声が自分の羞恥心をますます炙る。

かすかに残る理性をかりうじて爪に引っかけるようにして、セシルも苦悶の表情で春歌の胎内を進んでゆく。彼女の膣壁が、渾身の力を込めて異物であるセシルを追い出そうとする。それがたまらなく気持ちよくて、さっさと理性を手放してしまえと粗野な本能が声を荒げるのだが、前戯もほぼなく、秘部をほぐしてやることもしなかった手前、それは全ての氣力を使い果たしてでも守らねばならない礼儀だった。

やがて、骨のでっぱった一番細い部分に差しかかる。少し息をついて春歌を見ると、彼女の目尻から涙が幾筋も流れていた。

「……す、みません……痛かった……ですか？」

「いいえ、平気です……。痛くて泣いてるんじゃないんです。わからないんですが……なぜか……胸が……いっぱい……」

セシルはぎゅっと抱きしめた。春歌もセシルの背中に腕を回し、そのなめらかで汗ばんだ褐色の肌を抱く。

「……多分、こういうの……幸せって……いうんですね……」

「……イエス、マイプリンセス。……アナタは本当に……愛おしい……」

セシルは猫のときのように、頬をすり寄せた。そして、申し訳なさそうに言う。

「……これから、一番痛い所を通ります。アナタだけに痛い思いはさせません。……ワタシの背中に、爪を立てて。皮膚を貫いても構わない。アナタの印を……ワタシにください……」

「そんな……できません……」

春歌が驚いて腕を引つ込めそうになると、セシルはその手を掴んだ。

「……いいえ。これはワタシの希望です。……アナタの痛みの幾分かでもワタシに背負わせてください……お願いです……」

春歌が困ったように固まっていると、セシルはその腕を自分で背中に回した。

「マイプリンセス……、アナタはワタシの願いを叶えるだけのこと……。悪いことなどしてはいないのです」

そう言うと、セシルは腰に力を入れた。

「……いきます」

その声と共に、春歌の身体の中を焼けた杭が一気に奥まで刺し貫いた。

「ッッ——!! ああああああッッ!!」

春歌の目の前に火花が飛んだ。気を抜いていたので力が入っていなかったが、それでも初めて男を受け入れたそこは、セシルの質量分悲鳴を上げている。そして、図らずも彼の背中には

小さな爪痕がくつきりと残っていた。

「——……ッ! せま……い……ッ! 本当は……しばらく……」

……このままで……んっ! い、たい……でもッッ……!」

ずずつと内臓が外に引つ張られる。セシルが腰を引いたのだ。そんな感覚にさえ鋭い痛みを覚え、春歌はひとつと息を呑む。

「……うぐ……きます。もつと……爪を立てて……!」

「あああッ!!」

一度引つ張られた内臓が、今度は押し戻されてくる。お腹の中を掻き回され、痛み能耐えながら、春歌は泣くようにあえいだ。しかし、鋭い痛みはやがて鈍くなつてゆき、愛液と純血にも助けられ、セシルの動きになめらかさが出てくると、子宮のずっと奥の方で味わったことのない痺れを感じはじめた。

潤んできた嬌声に、セシルが気づく。

「……ああッ……。やつと……よくなつて……きましたか? んっ……はるか……! いい……ですか?」

「んっ……あ……はっ……!」

言葉が出ないのか、春歌はばくばくと口を開いた。それを見て、セシルが少し笑う。

「……よか……た。……痛いだけで……終わらせたく……なかつた……か、ら……」

ぐつと突き上げると、春歌の背中が綺麗に反り返った。「……ああ……もう……いけない……。げん、かい……。いき

ます……マイ……プリンセス……」

春歌の片足を高く持ち上げ、ピッタリと密着してから、セシルは小刻みに腰を揺らす。春歌の様子を見ながら、大きなストロークに変化させると、もう二人は本能の赴くままに身体を揺らし、快楽を貪った。——そして、せり出してきた子宮の最奥で、セシルが精を解き放つと、春歌の肉筒が煽動して蠢き、大量のそれを飲み干した。けれど、セシルの男根は萎えずに胎内で屹立とした姿を保ったままで。

「すみません、マイプリンセス。……まだ……足りない……」
「えっ……そんなっ？」

脈動する肉棒は春歌を刺したまま。セシルは滾った眼差しで春歌にのし掛かり、今までで一番熱いキスをした。

——その後、徐々にではあったが、春歌はミューズとしての力を取り戻し、再びアグナパレスを支える大きな存在となった。セシルも、王家の者として、彼女を生涯支え続けた。

……のであるが。

「ふ……ああ……セシ……るさ……！」

「……ここ……がいいのですか？ アナタの気持ちがいいところ……触れるたびにまだ増えていきますね……。春歌……なんて愛おしい人……」

あの儀式は、力を取り戻したあともずっと続いているのです……。

Make love Songs





3P

【中表紙イラスト】... エリンギ

プリ春アンソロジー発行おめでとうございます。
描かせていただき有難うございました！

pixiv id=174333



4P

【カラーイラスト】... 十壺

アンソロジー発刊おめでとうございます！
十壺/mio
twitter : @11nose pixiv id : 327599



5P

【カラーイラスト】... 中村みどり

アンソロジー発行おめでとうございます！

この度は素敵なアンソロに参加させていただき、ありがとうございました。
プリンス様に愛される春ちゃんを拝見するのが楽しみです！

<http://www.pixiv.net/member.php?id=364368>



6P

【カラーイラスト】... ちえり

プリ春ちゃんR18アンソロだなんてそんな素敵な企画にお招きいただき
恐縮です！素敵メンバーさんの中で浮いてないか今さら心配してます。
この一冊に素敵にえっちな春ちゃんがもりもり詰まってるかと思うと...
股k...胸が熱くなるな！一十木！！

普段はpixivの隅っこでもそそと那春ちゃん落書きしてます。ソツ(*´.´)っ pixivID:931687

21P～27P

【ピアノレッスン】...うに

Novels

ご寄稿くださった皆様、
そしてこのアンソロジーをご覧下さっている皆様、
本当にありがとうございます！
プリ春のR18アンソロという自分が見たいが為だけの企画にお付き合い
頂き本当に感謝です。プリンス様と春ちゃんは最高です！
この本を取り巻く全ての方々に愛をこめて♡

29P～36P

【ねまきてオフ!】...花沢

Make Love Songs発行おめでとうございます！
お誘いありがとうございました。

pixiv id=696759 <http://preluder.nukimi.com/> 花沢

37P～44P

【あなたと僕と星占い】...マキビ

Novels

お誘い誠にありがとうございました。拙作がほんの少し
でもお楽しみいただけましたら、幸いに思います。
大好きな那春ちゃん達が、ずっと幸せでありますように。

<http://nanos.jp/lattina/>

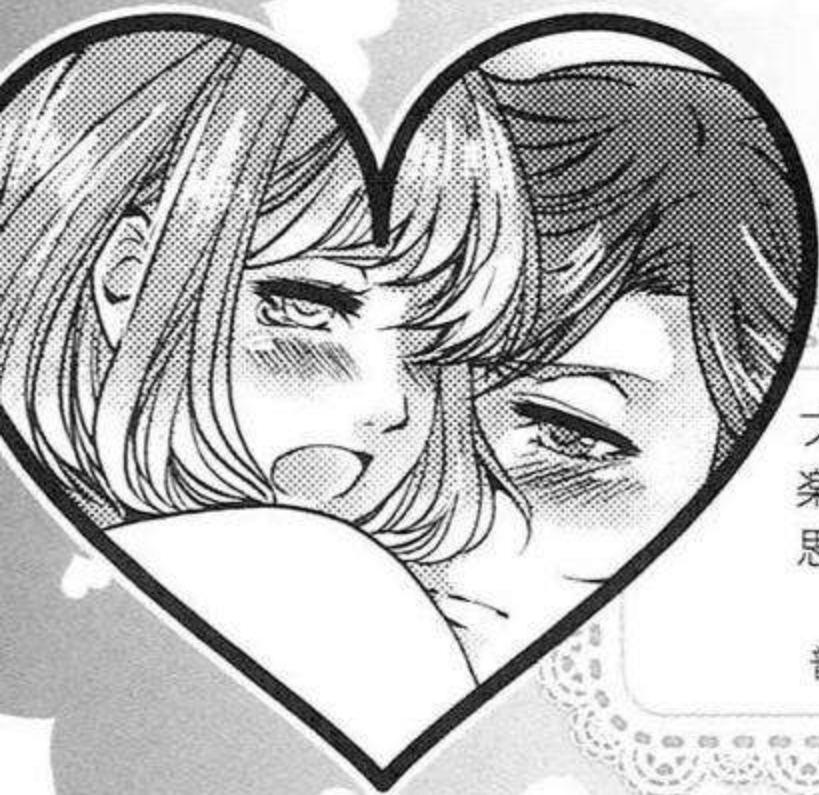
45P～50P

【ONLY WORLD】...天音真理

★プリ春R18アンソロジーご発行おめでとうございます★

トキ春いちゃEROが好きすぎて空気を読まずきよくぶどあつぷと
か描いてみました☆ーノ瀬さん視点ってことでここはひとつ^^^
今回はお招き頂きありがとうございました～！

<http://lovemary-le.lovesick.jp/>



51P～62P

【不可抗力の可能性とは。】... ノノ

プリ春R-18アンソロジー発行おめでとうございます！

楽しく描かせて頂きました。トキ春は言葉攻めがとても似合うCPだと思っています。

普段はwebでぼちぼち描いています→pixiv ID : 30642 Twitter ID : ultravioletnono



63P～71P

【誰とは言わない孤悲の話】... genshi

アンソロジー発行おめでとうございます！

ほんとこじれてこじれてがんじがらめのトキ春が好きです…
この度はお誘い頂き本当にありがとうございました！



73P～82P

【Abbandone】... 高槻けい

プリ春 R-18 アンソロジー発行おめでとうございます！

大変楽しく描かせて頂きました！

トーン貼りを丸投げしたら仕上げてくれた友人に土下座！



83P～88P

【専属Nailist】... 水了

Debutで翔ちゃんのネイルをする態勢を知った瞬間、
「これだー！」と思いました笑。

ほのぼのカップルの翔春なのであんまり濃くなくてすみません…
少しでもお楽しみいただけると嬉しいです☆



89P～100P

【ガマンできにゃい!】...おふよ

可愛い春ちゃんのアんな姿やこんな姿が詰まったアンソロに
自分も参加させて頂けるとは、恐れ多くも感激です。
お疲れ様でした!

■Pixiv■<http://www.pixiv.net/member.php?id=617830>

おふよ



101P～113P

【みだらな女神の聖なる儀式】...れん

発行おめでとうございます、れんです。普段はときメモGSジャンルに
生息してます。セシルを書いたのは初めてでしたが、いかがだったで
しょうか?楽しんでいただければ幸いです。自サークルには、他プリとハ
ルちゃんの3Pというマニアックな本もあるので、今回気に入っていた
だけの方、こちらもよろしく願いいたします(←宣伝)。ゲームにア
ニメにとプリ春ちゃんたちから目が離せないですね\性的な意味で/



Make love Songs

UTA★PRI
Pri♥Haru R18 Anthology
Make Love Songs

Colophon

発行：2012年6月24日
サークル：ナイトマーケット（うに）
MAIL：make lovesongs@gmail.com
WEB：http://g-9dept.net/mlsongs/

印刷：株式会社日光企画様



禁無断転載・禁無断複製
ネットオークションへの出品を禁止致します。



Member

Illust

エリンギ
十壱
ちえり
中村みどり
はんにゃG
リココ

Comic

天音真理
おふよ
しんぞう
高槻けい
にらゆき
ノノ
花沢

Novels

うに
genshi
マキビ
水了
れん

UTA★PRI
Pri♥Haru R18 Anthology
Make Love Songs

2012.06.24
Night Market Presents

